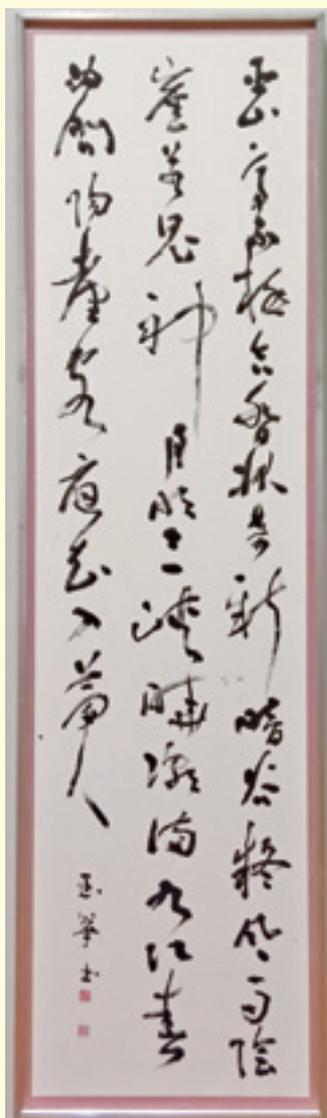


愛媛大学教育学部

第141号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

〒790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀 春 元 旦



愛媛大学教育学部同窓会役員一同

ご挨拶



愛媛大学
教育学部長

日野 克博

皆さま、新しい年がスタートしました。愛媛大学教育学部を支えてくださる同窓会の皆さまに、心より感謝申し上げます。日頃より、本学部の教育・研究活動に対し、温かいご理解とご支援を賜っておりますことに、学部長として深く御礼申し上げます。

教育学部の使命は、教員養成および教員研修の中核拠点としての役割を担い、次代を担う子どもたちを育てる学校教員を養成することにあります。社会や学校を取り巻く状況が大きく変化するなかにあっても、この使命は決して揺らぐものではありません。むしろ、価値観の多様化や教育課題の複雑化が進む今だからこそ、教育学部が果たすべき責務は、これまで以上に重みを増していると考えています。

革などは、その代表的な取組であり、学部の将来像を具体化する重要な挑戦として、今後も継続して力を注いでいく必要があると考えています。

教育学部の最も重要な使命は、学校現場で即戦力として活躍できる、実践的な指導力を備えた教員を養成することです。その成果の一つとして、令和七年三月卒業生の教員就職率は七八・六％となり、全国平均を上回る水準を維持しています。数値そのものだけでなく、地域の学校現場から本学部卒業生への信頼が積み重なっていることは、教育学部の取組に対する期待の表れであると受け止めています。これらの成果は、今後の学部運営や教員養成の充実を図る上で、大切にしていきたいと思います。

また、次年度で三年目を迎える「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」は、愛媛大学教育学部の特色を示す取組です。入学前プログラム、大学入試、入学後の学修支援、教員採用までを教育委員会と連携し、一体的に進めています。令和八年度実施の総合型選抜Ⅰ（地域教員希望枠）に向けた広報活動の強化に加え、令和十一年度入学者選抜から導入予定の学校推薦型選抜Ⅱ（仮・教員養成特別選考）についても、協議を重ねながら、制度の具体化を進めています。地域に根差し、地域の未来を支える教員を育てるという理念を、今後も

一貫して大切にしていきたいと考えています。

一方で、構成員数の減少や財政状況の厳しさを踏まえると、組織運営の合理化と機能強化は避けて通れない課題です。現在、委員会組織や業務内容の見直しを進めるとともに、教育DX・業務DXを同時に推進し、生成AIの活用にも積極的に取り組んでいます。その際、何より大切にしているのは、教職員一人一人の健康とウェルビーイングであり、対話を重ねながら、安心して働き、力を発揮できる職場環境づくりに努めています。

最後に、教育学部は、「一人を育てる人を育てる」という原点に立ち返り、単に教員を送り出すだけでなく、教育の質を地域と共に支え続ける存在でありたいと考えています。将来構想（ビジョン）に基づき、学部・大学院、附属学校園、教育委員会、地域社会が相互に学び合い、育ち合う関係を築くことで、愛媛大学ならではの教員養成の姿をより一層明確にしていきます。

学長の新年挨拶に示された「弱みを強みに、強みを一層の強みに」という改革の方向性を念頭に、大学改革と連動した教員養成改革を着実に進めてまいります。同窓会の皆さまには、引き続き本学部の発展にお力添えをいただき、今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

目 次

| | |
|--------------|---|
| 題字…………… | 故菊川 國夫 |
| 表紙作品…………… | 副会長 村上 朋子 |
| ご挨拶…………… | (1) 愛媛大学教育学部長 日野 克博 |
| 心 響…………… | (2) 人との出会いとつながりで磨かれる 西条支部長 山内 雅博 |
| 職場だより…………… | (3) 全てのことを糧にして 四国中央市・関川小教諭 松本 優果 西条市・西条北中教諭 山室日向子 子どもの成長に寄り添って 今治市・富田小教諭 石丸 千晴 教員を志して 伊予市・郡中小教諭 渡部真由佳 心掛け 久万高原町・直瀬小教諭 岩名 里花 子どもたちとともに 西予市・宇和中教諭 玉岡 真愛 |
| 学部トピックス…………… | (9) 愛媛大学教育学部附属才能教育センターとお茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所が連携協力に関する協定を締結しました 愛媛大学教育学部附属幼稚園の園児たちが手作りの神輿を担いで四校園を練り歩きました |

人との出会いと つながりで磨かれる

西条支部長
神戸小校長

山内 雅博
(平四卒)



振り返れば、私の人生の転機には、いつも「人との出会い」がありました。迷い立ち止まったとき、ある人の何気ない一言が背中を押してくれました。思いもよらぬ出会いが、新しい道を拓いてくれました。そして、それらのつながりが一本の太い線となり、今も私を支え、導いてくれます。愛媛大学教育学部を志したあの日から、校長として学校経営に携わる今日に至るまで私の歩みのすべてに、かけがえのない人との出会いが刻まれています。

高校時代の私は、教師になりたという漠然とした夢を抱いていたものの、具体的な将来の展望も描けずにいる生徒でした。そんなとき出会ったのが、愛媛大学教育学部聾学校教員養成課程という進路です。この選択こそが、その後の私の人生を大きく変える決定的な一歩となりました。大学では、



温かい恩師や先輩、そして志を同じくする仲間にも恵まれました。何より、障がいのある子どもたちとの関わりは、私に多くのことを教えてくれました。言葉が伝わりにくいもどかしさの中で、相手の表情を読み、心の声を聴こうとする姿勢。小さな変化を見逃さない観察眼。そうした経験を通じて、多面的に物事を見る力や、人としての感性が少しずつ養われていったように感じます。「人は、他者との関わりの中でこそ育つ」。教育の原点とも言えるこの実感が、私の心に深く根付いたのは、間違いなくこの時期でした。

さらに専門的な学びを求めて進んだ鳴門教育大学大学院では、また新しい世界が広がりました。全国各地から集まった教員と共に、優れた授業実践や研究に触れ、教育の奥深さと広がりを感じていく日々でした。夜遅くまで夢を語り合い、互いの研究や実践について議論を交わした仲間たちは、今も全国各地の教育現場で奮闘しています。距離は離れていても、同じ空の下で子どもたちに向き合っている同志がいる。励まし合い、刺激を与え合える存在がいることは、私にとって何よりの財産であり、心の支えです。

その後、教員として現場に立つてからは、若気の至りで、子どもたちと共に無謀とも思える取組をしました。休日に学校へ集まってお化け屋敷を作ったり、体育館を借り切って汗だくになって遊んだり。教科書を教えるだけが教師ではない。そう信じて、子どもたちと同じ目線で笑い、悩み、時

間を共有しました。今思えば、その時間は、子どもたちと真正面から向き合い、本当の意味での信頼関係を築くことを知るための、かけがえのない修業期間でした。そして、そんな私の突飛な行動を温かく見守り、許容してくれた先輩教員や職場の大らかさには、感謝の言葉しかありません。あの頃の失敗や成功体験のすべてが、今の私の教育観の礎となっています。



やがて教育行政に携わる機会をいただき、視点は大きく転換しました。それまで教員として見ていた景色とは異なり、「教育を支える側」の人々の懸命な努力と、制度を動かすことの重みを知りました。特に、教育委員会で担当した事業について文部科学省で発表させていただいた経験は、私の視野を大きく広げてくれました。一つの施策がどのように決定され、どのように現場へ届くのか。その責任の重さとやりがいを感じたことは、学校経営を考える上での大きな糧となっています。

再び学校現場に戻り、教頭として過ごした日々は、学びの多い日々でした。小規模校から大規模校まで三つの小学校を経験させていただきました。学校規模が変われば、組織の動かし方も変わります。地域性が変われば、子どもや保護者との関わり方も全く異なります。それぞれの校長先生の背中

から、リーダーシップの在り方や決断の重さを学びました。特にコロナ禍での対応は、正解のない問いの連続でした。前例が通用しない事態において、教育の本質とは何かを問い直し、手探りで模索する日々でした。組織としてどう危機に向き合い、子どもたちと教職員の間と心を守るか。苦しい時期だったからこそ、自分は何を大事にしたいのかという「自分の軸」を持ち続けることの大切さを痛感しました。日々の忙しさに流されそうになるときは、原点に立ち返る。信じる道を実践し続ける強さが、リーダーには不可欠なのだと思えました。

そして現在、校長として学校づくりを担う中で、私は今「子どもと教職員が共に伸び、地域と共に育つ学校」を目指して力を尽くしています。教育は、学校の中だけで完結するものではありません。子どもを中心としつつ、教職員、保護者、そして地域の人々がつながり合い、手を取り合って未来を共につくっていく営みです。人との出会いとつながりの中で、子どもたちも大人も磨かれていく。そんな機会を創出することこそが、校長である私の最大の役割だと信じています。

人は出会いによって磨かれ、支えられて成長します。私も多くの方々から温もりや励ましをいただき、今の私があります。その感謝を胸に、今度は私がまわりの人を助け、支え、そっと導ける存在として歩んでいきたいと思っています。出会ってくださったすべての方に心より感謝します。

| | |
|-------------------------|------|
| 教育学区の授業実践…………… | (11) |
| サポーター制度講演会報告…………… | (13) |
| ホームカミングデー…………… | (15) |
| 学生祭アラカルト…………… | (16) |
| 先輩を偲ぶ…………… | (17) |
| 「あしあと」先輩たちのあしあと…………… | (17) |
| 同窓会事務局 | |
| 会員の声…………… | (19) |
| ・「ちょボラ」で人生を豊かに…………… | |
| 寺尾満寿男 | |
| ・大拙・英訳「教行信証」の研究(三)…………… | |
| 吉原 宏文 | |
| 表紙作品について…………… | (20) |
| 新会員より…………… | (23) |
| 支部活動支援金交付要綱…………… | (24) |
| 教育学部同窓会からのお知らせ…………… | (25) |
| 放送大学入学生募集のお知らせ…………… | (26) |
| 会報送付停止等について…………… | (26) |
| 懇親会のご案内…………… | (27) |
| 思い出原稿募集…………… | (27) |
| 叙勲・寄付者名・敬弔…………… | (28) |
| 裏表紙…………… | (29) |
| 会員写真館…………… | |
| 探しています！…………… | |





職場だより

全てのことを糧にして



四国中央市
関川小教諭
松本 優果
(令六卒)

愛媛大学を卒業し、新居浜市と四国中央市の境にある、四国中央市立関川小学校での勤務が決まりました。関川地域は南に石鎚山脈の赤石山がそびえる、標高一一五メートルの場所にある学校です。校区にまたがる河川関川の河原には、ざくろ石と呼ばれる珍しい岩石が多く見られます。校区は広く、四〇分ほど歩いて登校する児童もいます。学校には何本もの立派な桜の木があり、四月には新一年生や転任してきた先生方を温かく迎えます。全校児童は九二名で、学年を越えた交流が盛んです。

令和六年四月一日、私は校長室で辞令をいただきました。職員室での初めての挨拶のときには、これから子どもたちの命を預かる立場になるのかと、その責任の重さを痛感しました。送り出してくださった学部の先生方の教えを胸に、教員生活はスタートしました。一年目は三年生を担任しました。明るく元気でやんちゃな子どもたちだと聞いていましたが、いざ始めると本当にやんちゃで困ることが多々ありました。それでも、個性豊かでにぎやかすぎる子どもたちのパワーにいつも元気をもらいました。一学期は分からないことが分からないという状況でしたが、毎日新しいことを学び、学校に通うのが楽しみでした。当時は毎日の授業準備や子ども同士の揉め事の解決などで何かと大変だったと思いますが、一学期の大変さはあまり記憶に残っていません。夏休みが明けると、子どもたちは体も心もとても成長したように感じました。そして秋口になると、学級運営につまずくようになり、今振り返ってみると、子どもの話に耳を傾けたつもりになっていただけで、本当はしっかりと聞くことができていなかったのだと思います。そして、子どもたちへの声掛けに苦慮し、叱ることが多くなりました。私が受け持ってしまったばかりに、もっと

伸びることができたはずなのに、伸びることができない一年だったと申し訳ない気持ちでいっぱいです。ですが、それがあの時の私にできる最大限だったとも思いません。子どもの地力でできる範囲をさせるのではなく、地力を伸ばしていく指導が大切だと学びました。そのためにも自分が多くのことに挑戦し、子どもが活躍できる環境を整えなければならぬと感じました。

現在担任しているのは二年生です。同じ階に他の学年がいる棟に移ると、先生方の関わり方を見ることができ、効果的なほめ方や叱る前にできる指導が多く見えてきました。二年目の今だからこそ、自分の学びにできているのかもしれない。楽しいことが大好きでユーモア溢れる子どもたちには多くのことを教えてもらっています。楽しむときは一緒になって全力で、私も素を見せて、一緒になって遊んでいます。切り替えるときは真剣に取り組み、そんな教師の在り方を子どもたちから教えてもらっています。そして何より、話をしっかりと聞くことを心掛けています。



来年度は今年と同じようにはいかないかもしれません。来年度は来年度で周りの先生方から学び、子どもたちから学ぶことが多くあると思います。卒業式や離任式を経験して、クラスでも職員室でも、そのメンバーでいられるのは一年間だけだと実感しました。だから私は、毎日先生方や子どもたちから学ぶように心に決めていきます。「先生、ガッツあるよ。」そう言うてくださったのは昨年の教頭先生でした。職員室でいつも先生方の様子を見守る教頭先生は、先生方の熱心なところや素敵なところを見付けるとすぐにほめてくださる先生でした。細かいコミュニケーションを普段から取り、困った時にはすぐに助けてくださる先生です。揉め事の際には、一緒に聞き取りに入ってくくださったり、対応の方向性を考えてくださったりしました。ガッツがあると言われるときは、正直、「そんなまさか、自分なんて。」と思いました。しかし、苦しい中で子どもと向き合っていくことは、自分を褒められると思います。そしてその言葉は私にガッツが無かったとしても、ガッツを与えてくれました。あるときああ言ってもらえたのだから、と苦しい時でも粘り強く向き合えます。

校長先生は、いつも校門で登校してくる児童に挨拶をしています。児童だけでなく、私たち教員のことも大切にしてくださいませ。校長先生とお話する少しの時間が心を元気にしてくれます。私が昨年一年を乗り越えられたのは、相談に乗ってくださいる先輩の先生方、叱咤し、支え、守ってくださいった校長先生や教頭先生のおかげです。

そして今年度着任された教頭先生は、どんな場面でも心配りを忘れない先生で、いつも仕事への向き合い方を学ばせていただいています。他校の先輩方からも学ぶことがたくさんあります。

関川小学校に来て二年目、二年生の子どもたちはよく「先生も関川二年生よね。一緒に入学したもんね。」と言います。二年目になり、こなせる仕事が増えましたが、一人では解決できないことが多くあります。日々勉強、日々吸収です。今受け持っている子どもたちにも、自分のできる最大限をもって接すること、それをこれからも続けていきます。

目の前の生徒と向き合うということ



西条北中教諭
山室日向子
(令六卒)

分らないことに飛び込む勇氣、相手に思いを伝えようとする姿勢、挑戦することの楽しさ――

こうした力は中学校時代の恩師のおかげで培われた。英語の授業での対話活動、弁論大会、英語キャンプなど、恩師は、コミュニケーションのツールとして英語を使う経験をたくさんもたせてくださり、人と関わる積極性を身に付け、新しい場所に飛び込むチャンスをつかむことができた。背中をいつも押してくれたおかげで、私は成長することができた。失敗したり落ち込んだりした時も、話を親身になって聞いてくれ、そのたびに私は立ち上がってまた挑戦することができた。私を大きく成長し、変わるきっかけくれたのは学校と恩師だ。かつて、私自身が恩師に与えてもらった挑戦する勇氣や安心感を、今度は私が教師になっ

て返したい。一度しかない中学校生活でその一瞬に寄り添い、生徒の可能性を広げられる教師になりたい。そんな思いを強く持ち続け、私は中学校の英語科教員になることを決めた。

大学で教育に関する勉強や教育実習に励み、昨年の夏に、教員採用試験に合格することができた。面接でも自分なりの理想の教師像を語り、合格した時は前向きな気持ちでいっぱいだった。しかし、実際に現場に立つと、その理想をどのように具体的な行動として生徒に示したらよいか分からず戸惑いの連続だった。まず、「どの基準でどのように指導すべきか」分からない。許容すべき行為と、注意すべき行為のグレーゾーンで迷ってしまうことも多い。そのため自分の判断に自信が持てず、その場しのぎの声掛けになってしまった場面も多々あり、指導の軸のなさに落ち込むこともあった。部活動は女子卓球部の顧問となった。未経験の競技であったため、どのように運営していくべきか、強いたらいいのか悩みながらのス

タートだった。生徒の主体性を大切にしたい気持ちはあっても、指導者としてどこまで踏み込んだらよいのかで揺れ動き、自分の中で一貫した考えを持っていないことに不安を感じていた。授業でも、準備を重ねても実際の授業ではうまくいかないことが多く、理解度の差への対応や時間配分、言葉選びなど、自分の未熟さに向き合わざるを得ない場面が続いた。

そのような中で、日々私を助けてくれる人の存在の大きさを強く感じている。相談をすれば丁寧にアドバイスをくださり、時には自分の失敗談を交えながら励ましてくれる先輩の先生方の姿に、心から感謝の気持ちが湧いてきた。また、いただいた助言をそのまま生徒に伝えるだけでは不十分であり、「自分が納得した言葉」でなければ生徒の心には響かないことも学んだ。先輩の先生から、「私たち教員はその学年や部活などやり直しができるかもしれないけど、生徒にとって、一瞬の経験はもう二度とやり直せない。だからこそ、私たちはその一瞬を大切に

教えられ、指導に向き合う姿勢を改めて考えさせられた。ある時部活動で、自分が納得した言葉だけを選んで部員に話したことがあった。拙くても自分の言葉で伝えると、生徒たちが真剣に耳を傾けてくれたように感じ、その姿に言葉の重さと自分がしっかりと生徒に向き合うことの大切さを実感した瞬間だった。

目の前の生徒と向き合っているのは、先輩教師の代わりでも、周囲の誰かでもなく、紛れもない私自身である。この当たり前のようで忘れてしまっていた視点に気付けたことは、半年間で得た大きな学びだった。そして様々な先生方からいただいたアドバイスをもとに経験を重ね、力を付け、少しずつ実践できるようにしたいと感じている。どの言葉も将来の自分を支える「引き出し」として大切に心に蓄えていきたい。半年間教員生活を送ってきて、まだ自分の授業や部活動経営、生徒指導は軸が定まらず、生徒を混乱させ、申し訳ないと思う日々が続いている。しかし、それでも生徒は日々前向きに頑張り、悩みな

がら成長していく姿を見せてくれた。その姿から私自身も力をもらい、「もっと良い教師になりたい」と強く思うようになった。また、学校には多様な魅力や強みを持つ先生方がいて、その先生方の指導や生徒との関わり方を見るたびに、自分もこの環境で学ばせてもらっていることのありがたさを感じている。

私は、これから授業力・部活動経営力・生徒指導力を少しずつ身に付け、教員としての魅力を付けていきたい。そして、状況や生徒に応じて柔軟に対応するための「引き出し」を増やすことを特に意識して頑張っていきたい。子どもたちの夢をかなえられたのは本当に幸せなことだ。ただ教師になっただけで満足するのではなく、生徒の学びと成長に寄り添い、価値を与えられる教師を目指して努力を続けていきたい。今後も、恩師や周りの先生方のように、目の前にいる一人一人の生徒と真摯に向き合い、経験を重ねながら自分なりの指導の軸を築いていきたい。

子どもの成長に寄り添って



今治市
富田小教諭
石丸 千晴
(令七卒)



教師になって半年が過ぎた今、毎日が今日のことではないの状況で、何とかここまで来た感覚がある。これまでを振り返ると、思っていた以上に仕事は多く、思うようにいかない日々が続き、正直、悩み焦るばかりの日々だった。しかし、子どもたちは本当にかわいく、純粹な目や行動が愛おしく思えて、それが仕事への活力となっていた。

一番大変だったことは、心と体のバランスを保つことだった。慣れない仕事をする中で、心に体がついていけず、脱力感を感じたり、風邪を引くことも多々あった。改めて、社会人は健康な身体があつてこそだと痛感した。しかし、うれしい瞬間もたくさんあった。授業に全く集中できず、「わからん」が口癖の落ち着きのないA児がいた。彼にどう勉強を教えたらいいのか、どう集中させたらいいのか分からないまま時間が過ぎてい

た。しかし、このままではいけないと思い、まずは、話し掛ける回数や、彼を観察する時間を増やし、休み時間に話したり意識的に褒めるようにした。すると、あるときから、彼から話し掛けてくることが増え、楽しく会話をすることができるようになった。気が付くと、

彼が算数科の授業の時間になりかるとノートを記録するどころか、発表もするようになった。それから彼の成長はすさまじく、文字が丁寧になったり、進んでみんなのために配布物を配ったりするなど、係の仕事を率先的にするようになった。これはかなりの驚きだった。子どもとの関わりや信頼関係が改めて大切だと感じた出来事だった。私が特にうれしく感じるのは、子どもたちの成長を感じられたときだ。生活や学習の態度など、様々な面で困難を抱えた子どもに、根気強く向き合い、指導を続けていると、ふとしたときに、「あれ、なんか意識が変わったな」と思う瞬間がある。できるようになる時間も、早さも度合も、子どもによって違うが、その瞬間は誰にでもあると思う。そのことに気付いたとき、どんどん褒めてその喜びを学級で共有すると、子ども

がプラスのループに入っていく感覚がある。意識を自覚させることで、行動にも変化が起こり定着していくと思う。そのようにして、子ども自身に自分の成長を実感させられるようなきっかけを作っていききたい。

初任者の研究授業をすべて終えて、今感じるのは、常に学び続けることができるこの仕事は本当に楽しいということだ。子どもに支えられながら、子どもと共に教師として成長していくことができ。また、たくさんすすきな先生方の背中を見て、教師としても人としても成長することができ。特に現任校の管理職の先生方には、精神的に私が落ち込んだときに、たくさん悩みを聞いていただき、数え切れないほどのアドバイスをしていた。どんなときも応援してください、温かい言葉を掛け続けてくださる。私がかこまでやってこれたのは、間違いなく周りの先生方の支えがあったからだ。本当に心から幸せだと感じる。この恩をいつか誰かに返していけるように、教師として、そして人としての人間力を身に付けていきたい。

今後の目標は、授業力の向上である。まずは自分が楽しいと感じ、熱意をもって授業研究に取り組むことから始めるのではないかと思う。算数科の校内研究授業では、「重さ」の単元で、量感をつかむ体験的な授業を行った。自分も興味がある単元で、準備には時間と労力がとても掛かったものの、子どもたちが笑顔で活動に取り組む活気のある授業を行うことができた。一方、国語科の研究授業では、「くらしと絵文字」の単元で、説明的文章の読み取りの学習を行った。子どもたちはどう読み取らせたらいいのか、構成も発問も例の出し方もこれでいいのか分かんなく、不安がたくさんあった。まずは、作った指導案通りに指導することが大切だと思つて取り組んだが、考えた以上に固い授業となり、算数科の授業に比べると、楽しさやおもしろさ、子どもの学びの深まりや感情の高ぶりが少ない授業になってしまった。これらの経験から、まずは自分が学習内容を楽しく読み込み、子どもの立場に立って例の出し方を考えたり、どんな発問にするのかいくつも言い回しを考えたりすることが重要であると感じた。子どもを引き付ける授業を作るのは、なかなか難

しいが、いろいろなアイデアを実際に試したり、複数の教科書会社の指導書を比較したり、発問や導入を工夫したりするなど、多様な教材研究の方法があることを学んだ。このような学びを通して、子どもが「楽しい、分かりやすい、好きだ」と思える授業を少しでも多く実践していきたい。自分の授業を通して、一人でも多くの子どもが「学ぶことが楽しい」と思ってもらえることが教師として最高のフィードバックだと思う。そのような目標に向かって、日々学び、挑戦を続けていきたい。

後半に入つて、「子どもたちは、確実に成長している」と感じる機会が増えた。学力が上がつた子、授業態度が落ち着いた子、人との接し方が変わった子、感想を書く分量が増えた子、いろいろなところで一人一人が成長している。子どもの小さな成長を意識して見付け、それを子どもに笑顔でフィードバックし、成長を共に喜び合える温かい学級を、一年が終わるその日まで作り続けていきたい。そして、全ての子どもの成長の過程に寄り添い、子どもの笑顔を増やすことができる教師になりたい。

教員を志して



伊予市
郡中小教諭
渡部真由佳
(令六卒)

私が教員の道を志したのは、二つの理由があります。一つは、両親が教員であったため、この職業が極めて身近な存在だったことです。幼い頃から、教員の多忙さと、生徒の成長を目の当たりにした際の大きな喜びを間近で見ってきました。

もう一つは、私自身が、教員との出会いを通して良い方向に変わっていく人たちの姿を見てきたことです。その変化を見るたびに、私もまた、誰かの人生を支え、導くことができる人間になりたいと強く願いました。

教壇に立つ前の理想は、「子どもたちが楽しんで学び、安心して失敗できる、活気あふれる教室」を創ることでした。実際に教員としての日々が始まると、理想だけでは乗り越えられない壁に直面し

ますが、その大きなやりがいこそが、この職業の魅力だと感じています。

去年の二年担任として分かったことは、子どもがだじゃれや遊び心を大好きだということでした。学習に興味を持たせるため、先輩の授業からヒントを得て、自分のクラスでも物語性のある導入を試みました。その結果、子どもたちの学習状況に合わせて感情表現を代弁するキャラクター、「わかっただぬき」「こまったぬき」、そして努力を肯定する「がんばったぬき」が生まれました。そして「がんばったぬき」という名の掲示板を教室に設置しました。私は、授業中や清掃の時間など、目立たないながらも頑張っている児童の名前をそこに書き出し、具体的に褒めるようにしました。その頑張りを認め、可視化することで、「自分の頑張りは見てもらえているんだ」という安心感を子どもたちに与えることができました。さらに、児童同士もお互いの頑張りを日常的に意識するようになり、誰かが努力しているのを見つけると私に教えて

くれるようになりました。その結果、子どもたちの意識は大きく変わり、互いに認め合う前向きなクラスの雰囲気形成され、教室内の一体感と集中力が増しました。子どもたちの信頼に応えるため、私は彼らの笑顔を失うことなく、「この先生で良かった」と思ってもらえる教員でありたいと強く決意しました。そのためにも、「清く・正しく・美しく」という言葉を胸に、常に児童の模範となるよう努めていきたいと考えています。そして、目の前の児童には、その子を深く愛するご家族がいるという事実を忘れず、責任感を持つて真剣に児童と向き合っていくかと思っています。

教員という仕事は、児童との関係だけでなく、多岐にわたる仕事は、同僚や先輩教員との連携なくしては成り立ちません。私が日々の困難を乗り越え、教育者として成長できているのは、職場の皆さんに支えてもらっているからです。経験豊富な先生方からの具体的な指導法や助言は、私の教育観を豊かにしてくれます。このプロ

フェッショナルな環境が、私を前に進ませてくれる原動力となっています。

子どもは極めて素直です。目に見えたものを感じたままに受け取るため、教員にごまかしは一切効きません。だから、私は、児童と遊ぶ際は、常に全力で遊ぶことにしています。遊びを通して児童と「楽しい」という感情を共有し、人間的な関係を深めていきます。

また、児童の素直な言動は、教員の行動を映し出す「鏡」です。子どもは、周りの大人の言動をそのまま再現する力があります。例えば、失敗をした友達への声掛けも自然と教員と同じことを言うようになります。だからこそ、普段の自分の言葉遣いや身だしなみが、児童に真似されても恥ずべきでないかを常に意識して過ごしていきたいと考えています。

子どもの成長の速さを前にすると、「自分も立ち止まっていけない、常に成長し続けなければ」という強い使命感に駆られます。教員として、他者の行動や過去を変えることはできません。しかし、

「過去と他人は変えられない。自分と未来は変えられる。」という言葉を胸に、自分が変わっていく努力を続け、指導法を更新し続けることこそが、より良い未来の教育環境を築く唯一の道だと信じています。

児童のために教材を研究し、単元を計画し、新たな知識を得る。そして、学んだことを活用して児童に教える中で、児童の「わかっただぬき」という反応が、自身の大きな活力として還元される。これこそが、教員の尽きることのないやりがいだと、私は確信しています。

教員という仕事は、確かに多忙で責任も重い仕事です。しかし、その苦勞を凌駕するほどの感動と喜びが、この仕事には満ち溢れています。これからも、児童一人ひとりの個性と可能性を信じ、彼らと共に学び、成長していく喜びを噛みしめたいと思います。教員として、一人の人間として、児童に寄り添い、共に歩む決意を新たに、目の前の教育に取り組んでまいります。

心掛



久万高原町
直瀬小教諭
岩名 里花
(令三卒)

驚きですが、今年度で教職五年目になりました。時の流れの速さにびっくりしています。現在でも愛媛大学で学んだことが、私の基盤になつていきます。在学中、ほとんど毎日踊る日々を過ごしていました。もちろん、小学校教員になるために教育学部を選び、楽しく学生生活を送っていましたが、今の私をつくっているのは間違いなく部活動の経験です。私が三回生だった三月、コロナウイルス感染が広がり、大学に行くことが出来なくなりました。敵は目に見えないウイルス。毎日部活の仲間と会って踊っていた私にとつて、人と会えないことはストレスでしかありませんでした。この怒りを向ける矛先はどこにもありません。このままでは、学生生活最後の一年を棒に振ると思ひ、「今この状況でできること」を探すようになりました。その結果、自分たちのできることは全てやりきり、四年間を終えることができました。本間に大学時代にたくさんさんの愛情で育てていただいた先生方に感謝の

気持ちでいっぱいです。

松山市で過ごしたスタート三年間は私にとつて、驚きの連続でした。自分の理想とのギャップ、うまくいかないもどかしさと経験不足の壁にぶち当たりました。そんなとき、私の心を奮い立たせてくれたのは、小学校教員になることを後押ししてくれた、高校のときの担任の先生の言葉です。「まずは修行の数年間。経験と仲間と信頼を得て、あなたの好きなようにやってみなさいよ。つまらないしがらみに負けないことです。」最初からうまくいかないのは当たり前。自分のできることを精一杯やろうと思ひました。勤務校の先生方は、いつも私のことを気に掛けてくださり、本当にたくさんさんの先生方に助けていただいた三年間でした。

現在は、久万高原町の直瀬子どもたちと日々を過ごしています。全校五名の学校で、子ども



ちはとても可愛らしいです。学級というよりも全校で関わる事が多く、一人一人と関わる時間が多いいことが一番の魅力です。毎日みんなとたくさん話すことができず。また、自然が多く、田植えや稲刈りなど、初めて経験したこともたくさんあります。冬には、みんなでスキーやスノーボードに行きました。地域の方々ととても温かく、いつも学校のことを気に掛けてくださいます。地域にも行事があり、夏の花火大会、秋の祭りなど、盛んに行われています。そんな直瀬のことが大好きです。こんな素敵な場所で勤務できることをとても幸せに思ひます。

私は、この仕事をする上で心掛けていることが二つあります。一つ目は「何事も楽しむこと」です。学校では、いろいろな人と関わりあいます。私は、子どもたちと何気ない会話をするのが大好きで

す。昨日観たテレビ、最近のゲームなど朝登校してからや、休み時間に垣間見せてくれる授業では聞けない話を聞くのが好きです。その子のことをよく知ることができる時間だと思ひています。意外なところ共通点が見えたり、学校で見せる顔とは違う姿を知ったりすることがあります。そんな何気ない会話を楽しむことはもちろん、休み時間の遊びも全力で楽しみます。教員を始めた初任者の頃から、できるだけ宿題を朝の時間に見切り、休み時間は子どもたちと遊ぶようにしています。体を動かすことが好きなので、鬼ごっこやドッジボールなどなんでも一緒に楽しみます。休み時間は学級だけでなく、違うクラスの子ともたちとも関わる事ができて、コミュニケーションの場になっています。また、学校だけでなく休日も全力で楽しみます。とにかく何事も楽しむようにしています。

二つ目は「なんでも挑戦」です。子どもたちに「失敗を恐れず、いろいろなことに挑戦しよう」とよく声を掛けるのですが、私自身もいろいろなこと挑戦するようになりました。昨年はスノーボードに挑戦しました。最初は、思うように滑れないのであざがたくさん

で滑りましたが、数回久万スキーランドに行き、スイスイとまでは言えませんが滑れるようになりまし



に触れることができました。また、新たなダンスのジャンルに挑戦しました。もともと得意なジャンルではない違うジャンルをやるのは、得意なことの中に苦手を探すという事です。自分ができない部分にあえて挑戦することで、できない自分にショックを受けることもありました。しかし、身体の動かし方が分かってくと新たな世界が開けてとても楽しくなりました。引き続き負けずに挑戦したいです。「何歳になっても、いつでも挑戦できる！」ことを自分で体現しながら子どもたちに伝えることは、簡単なことではないですが、背中で見せることはとても大事だと思ひています。

これからも自分の心掛けていることや大切にしたいことを見失わず、明るく元気に過ごしていきたいです。そして、様々な人やものに感謝の気持ちを忘れず過ごしたいです。

子どもたちとともに



西予市
宇和中教諭
玉岡 真愛
(令六卒)



薬剤師になりたいと長年考えていた私の夢が中学校教師に変わったのは、高校二年生の時でした。

子どもたちと一緒に楽しみ、苦しみ、ともに成長しようとしている方に出会い、教師という仕事を志すようになりました。そして、昨年度からは地元である南予で、数学教員として勤務することができています。

南予一の生徒数を誇る宇和中学校で迎えた昨年の四月。同期の先生方が学級担任や顧問を担当しているなか、一年目は勉強を、と配慮していただき、副担任と副顧問を持たせていただきました。そこから慌ただしい日々が過ぎていく中で、自分の授業に納得いくことがほとんどなく、どうしたらうまく伝えることができるのかと、数学に本気で向き合いました。時間を見付けて、先輩教員の授業を何度も見に行かせていただきましたし

た。そのおかげで、数学の授業についてはもちろん、学級経営の様々な方法も学ぶことができた初任者としての一年になりました。何をするにも「初めて」という言葉が付き、不安で押し潰されそうな一年目でしたが、自分から多くの生徒と関わり、毎日を充実させることができました。

そして二年目の今年。担任を持つことは分かっていたのですが、顧問と司書教諭、数学主任を初めての仕事として任せていただきました。何から手を付けていけばいいのか分からず、困ることも少なくなかったのですが、多くの先生方に支えていただき、何とか業務をこなすことができています。担任としては、「こんなクラスにした」と昨年度の経験から頭の中に想像を膨らませていました。しかし、実際に中学一年生の担任として学級経営をしていく中で、その



想像を実現することの難しさを感じています。一学期には、遠足や集団宿泊研修、二学期には、運動会や合唱コンクール、秋輝祭(文化祭)、ふるさと祭りなど、多くの行事も行われました。行事ごとに、少しずつ成長していく子どもたちを見てみると、私も負けてたまるか、という気持ちにさせられます。まだまだ指導力が足りないと

思うことばかりですが、今後子どもたちが大きく成長できるように、全力でサポートしていきたいと思っています。また、数学の授業に関しては、「昨年度行った授業だから、同じようにすれば、うまくいく」と考えていたら、全くうまくいかないのが現状でした。やはり、子どもによって、教え方を少しずつ変化させていかなければいけない、教材研究を怠ってはいけない、と気がかされました。苦手な生徒が多い教科だからこそ、子どもたちが「ここ分かった!もつと解きたい!」と満面の笑みで言っている姿を見ることが何よりも嬉しいです。この瞬間を少しでも増やせるよう努力していきたいです。

どんなにつらいことがあっても



も、楽しく前向きに教員生活を送ることができているのには、二つの理由があると思っています。

一つ目は、先生方の手厚いサポートです。宇和中の先生方は、私よりはるかに多い仕事をこなしながら、何か相談をした際には、嫌な顔を一つもせず、親身になって相談ののつてくださいます。昨年度は、何も知らない私のために、授業や朝の会、終わりの会なども快く見せていただきました。そのおかげで、悩みを抱え込むことなく、多くの知識や技術を学ばせていただき、自分自身の成長へと繋げることができています。私も少しでも早く、多くの人の役に立てる人になれるよう、努力を続けて

いきたいと思います。

二つ目は、大学で出会った多くの同期たちのサポートです。卒業後、多くの同期が東予や中予での勤務になり、簡単には会うこともできなくなりました。しかし、長期休みなどに会うと、同じように頑張っている話を聞き、頑張るパワーをもらいます。また、同じ職種だからこそ、相談し合えることも多く、心の支えになってくれます。これからも、この繋がりを大切にして、切磋琢磨し合いながら成長していきたいと思えます。

楽しいことだけでなく、つらいことや悩むことも多くありますが、すべては子どもたちの成長のために、教師としてまだまだ成長していきたいと思えます。毎日が充実していて、学校に行くことが楽しいと思っていた私の中学校時代と同じように、学校に行くことが楽しみだと感じられる学級をつくるのが今の目標です。そして、日々支えてくださっている周囲の方々への感謝を忘れず、いつか恩返しができるように努力していきます。

学部トピックス

愛媛大学HPより

◆愛媛大学教育学部附属才能教育センターとお茶の水女子大学サイエンス & エデュケーション研究所が連携協力に関する協定を締結しました

【七月四日(金)】

令和七年七月四日、お茶の水女子大学にて、愛媛大学教育学部附属才能教育センター（EUG ATE）とお茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所（ISE）が連携協力に関する協定を締結しました。

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所は、科学教育の振興と科学文化の醸成を柱に、長年にわたって教育・研究・社会貢献の三位一体の実践を積み重ねてきた研究所です。特に、理科教材や自由研究に関するデータベースの構築と公開は、科学教育のアクセシビリティを飛躍的に高め、多くの教育現場や家庭に探求

的な学びの機会を提供しています。また、被災地や不登校の子どもたちへの支援、そして多様な個性や背景を持つ学習者一人ひとりに応じた教材提供の取組は、まさに私たち才能教育センターが掲げる理念とも深く響き合うものです。

愛媛大学教育学部附属才能教育センターは、個性が協調し合える社会の実現を目指し、本年四月に発足いたしました。全ての子どもがもつ内なる可能性に光をあて、その力が正當に認識され、育まれる社会の構築を目指し、研究・教材開発・人材育成に取り組みます。お茶の水女子大学サイエンス&エ

デュケーション研究所との連携協力を通し、開発的、実践的な教育、研究の新たな展開が生まれることを確信します。

本年はお茶の水女子大学創立一五〇周年という記念すべき節目の年です。このような歴史的な年に連携協力の協定を結ぶことができるのは、私たちにとっても大きな誇りであり、今後の協働が日本の才能教育、科学教育を牽引する大きな原動力となることを、心より願います。千葉和義所長をはじめ、協定の実現にご尽力いただきましたすべての関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



◆愛媛大学教育学部附属幼稚園の園児たちが手
作りの神輿を担いで四校園を練り歩きました
【十月六日(月)】

十月六日(月)、秋晴れの中、愛媛大学教育学部附属幼稚園の園児たちが、手作りのお神輿を担いで、四校園を元気に練り歩きました。

まず、園児たちは、近隣の若宮神社へ行き、大人神輿や子ども神輿を興味津々で見学し、地域の方にお神輿についていろいろ教えてもらいました。

幼稚園に帰り、練り歩きの前に遊戯室にクラスごとに手作りした個性豊かなお神輿が勢ぞろいし、みんなでお披露目会を行いました。

お披露目会の後は、クラスごとに手作りした自慢のお神輿を担ぎ、「わっしょい！わっしょい！」と元気な声を響かせながら、附属学校園を練り歩き、三校園の教職員や児童・生徒たちにお披露目を行いました。

各校園で、教職員や児童・生徒のみんなに温かく声をかけてもら



い、嬉しそうにお神輿の説明を生懸命行いました。
附属学校園では、今後もこのような活動を通して、四校園間の交流を深めてまいります。



附中



附小



附特支

教育学部の授業実践

今回は、教育学部理科教育が開講している授業を紹介いたします。なお、この紹介内容は愛媛大学HP掲載の「授業紹介 I Report」から一部抜粋したものです。

理科観察実験演習 2、理科観察実験研究 2

教育学部

掲載内容は取材当時のものです。

担当教員：向 平和ほか／対象：[理科観察実験演習 2] 教育学部 1 回生～、[理科観察実験研究 2] 教育学部 2 回生～
小学校および中学校の観察・実験を、理科観察実験演習 2 で体験、理科観察実験研究 2 で実践し、その観察・実験の内容、教授法等について省察しながら、観察・実験を指導できる教員を目指します。講義は、理科観察実験研究 2 の学生が指導者、理科観察実験演習 2 の学生が受講者となり、教える側と教わる側の立場で実践的に指導法を学びます。

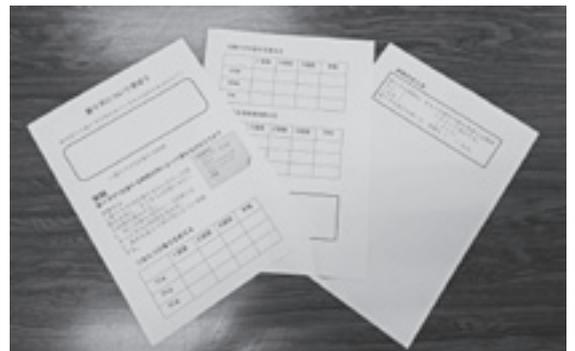
【授業内容】

教育学部学校教育教員養成課程の専門教育（理科）の授業で、おもに 1 回生を対象とする「理科観察実験演習 2」と 2 回生以上を対象とする「理科観察実験研究 2」の合同講義のレポートです。3、4 回生と大学院の学生もメンター役で模擬授業に参加しました。

この日は、「振り子について学ぼう」をテーマに、教師役の 2 年生（1 人）が生徒役の 1 年生（6 人）に対し、小学校高学年向けの模擬授業を行いました。学生らは自主的に準備を行い、講義の始業時間とともに模擬授業が始まりました。

まず、白衣を着用した理科教師役の学生（以下、教師）が、振り子についての解説を行いました。「身近なもので振り子が使われているものは？」という質問を生徒役の学生（以下、生徒）へ投げかけ、時計やブランコなど振り子の原理で動くものを確認しました。その後、「では、それぞれに揺れ方が異なる振り子が 1 往復するのに要する時間（周期）は何によって変わるのだろうか」というテーマに発展し、それを調べるため、実験を開始しました。

実験は生徒 6 人が 2 人ずつの 3 つのペアで行いました。①おもりの重さ（10g、20g、30g）、②振り子の長さ（30cm、60cm、1 m）③振る角度（10度、20度、30度）の 3 つの条件を変え、それぞれ 3 パターンでの振り子が 10 往復する時間を計測し、1 往復にかかった平均時間を算出しました。生徒たちは、小学生の気持ちに戻って仲間と楽しく実験を行い、教師は、各ペアのやり方や進捗を見守りながら指導し、和やかに実験が進みました。3 回生、4 回生、大学院生は、その場でアドバイスをしながら、模擬授業の様子を見学しました。



ワークシート



実験後、それぞれのペアが結果をまとめ、結果の数値とそこから分かったことを報告しました。3つのペアの実験結果から、「振り子の周期は振り子の長さによって変化する（振り子の等時性）」という結果を導き出すことができました。

模擬授業終了後は、上級生の進行で本日のまとめを行いました。上級生からは授業の良かったところ、改善すべきところの率直な意見とアドバイスがあり、担当教員からの講評で授業は終了しました。

学年の異なる学生がそれぞれの立場で自ら考え行動し、それぞれの視点で教員としての指導することについて学ぶことができる、教員を目指す皆さんにぜひ受講していただきたい、実践的な講義です。



【教員からのコメント】

この講義は、「理科観察実験体験プログラム」という準正課活動を授業化したものです。もともと、その準正課活動は理科の観察・実験の指導について実践的に学びたいという学生からの要望からスタートしました。様々な学部、学科の学生が理科の観察・実験について体験し、実際に指導する機会を提供するプログラムで、多くの卒業生がこの準正課活動で学んだことを活かしていると好評でした。2016年の改組をきっかけに児童・生徒役を理科観察実験演習1・2、教員役を理科観察実験研究1・2という講義に設定し現在に至っています。単純な話でいうと、自分が体験したことがないことを教えることはできない、また、観察・実験を体験することと観察・実験を指導することも違う。この2つの課題解決をそれぞれの授業の到達目標に設定して実施しています。



さらに教科内容の専門の教員と教科指導を専門とする教員と一緒に指導しているのも本授業の特徴としてあげられます。深い専門的な知と実践につながる指導の理論を繋げる授業科目として位置づけています。また、ICT (Information Communication Technology) 機器も活用しながら、異なる視点で学生が協働で理科の楽しさを実感しながら学びあう機会となっています。

【学生からのコメント】

理科観察実験演習2受講生から

本講義では、先輩からたくさんのお話を学ぶことができます。先輩方に交代で講義をしていただきますが、私自身、先輩方の理科に関する知識量の多さに毎回驚き、「自分も頑張らなきゃ」という気持ちになる講義です。本講義の良い点は他にも、実験などを多く行い、座学ではなく、能動的に学びを深められる点です。大学では、小学生が実際に行う実験などは、理解している前提で講義が進むため、実際に実験を行わないことも多くあります。口頭だけや動画の説明だけでは、実験について深く理解することができません。しかし、この講義では魚の解剖や月面の観察など毎回異なる実験を行い、そこからたくさんのお話を学ぶことができます。「実験」は予想と異なる結果がでたり、想像もしていないことが起こったり、失敗したり、やらなきゃわからない点があり、そこが面白い点だと再実感することができました。また、授業のあとに振り返りを行うため、授業の観点なども学ぶことができます。私たちが将来、教員になった際には実験の面白さを子どもたちに伝えることが重要なため、実験を通して学ぶ実践的な講義だと思います。

理科観察実験研究2受講生から

本講義では、小学校サブコースの学生を相手に実際の授業に近い形で模擬授業を行うことができ、小学校の理科を教える上で重要な実験を通してより実践的な経験を積むことができます。授業の作成時、授業後に先生方や院生の方、他の学部生から様々なアドバイスをいただくことができるため、自身では気づくことができなかった修正点等に気づくことができ、それを繰り返すことでより良い授業作成につながっているように感じます。また、他の学生が授業をしている様子を観察することで、その授業の良い部分を学べ、より自分自身の成長につながるように感じます。授業の準備、予備実験など準備段階で大変な部分もありますが、将来教員を志す上で自身の成長につながる講義だと思います。

教育学部サポーター制度による

特別講演会報告

特別講演会

演題 「教育学部 中庭物語」
講師 元小学校長 菅田 顕氏
(昭和三四年中四卒)

令和七年十一月二十日(木) 教育学部大講義室において、前教育学部同窓会副会長で元小学校長の菅田顕氏による特別講演会「教育学部 中庭物語」があり、学生他約五十人が受講しました。

講演会は、教育学部理科教育教授 向 平和先生の進行で始まり、はじめに日野克博学部長並びに高橋治郎同窓会長の挨拶と講師の紹介を行いました。

この特別講演会は、同窓生・卒業生を中心に、教育学部サポーターに登録いただき、教職はもとより多方面からいろいろな支援をしていただく「愛媛大学教育学部サポーター制度」の取組みの一環として平成二十一年から実施しており、今回で二十二回目になります。

講師の菅田 顕さんは、昭和十二年松山市の生まれ。昭和三十四年愛媛大学教育学部を卒業し、中学校の数学教師になり、愛媛大学教育学部附属中学校などを経て、松山市立清水小学校長を最後に定年退職されました。その後、松山ロシア兵墓地保存会第二

代会長、元愛媛大学教育学部同窓会副会長などを務められ、地域の活性化や後進のご指導ご支援に幅広く活躍しておられます。

【講演要旨】

皆さん、よろしくお願ひします。

ご挨拶をいただいで、なんだか現職時代の授業のようで緊張してしまいました。今日は「教育学部中庭物語」という形で、この地に残る碑や歴史についてお話ししたいと思います。あの中庭にある「師道讃仰之碑」。私はあれを見るたびに学生さんにぜひ知ってほしい、と感じてきました。実は私自身、この碑の存在をはっきり認識したのは、附属中学校で研究をしていたときでした。碑文を読んでみると、「あつー」と思うほど、学級経営や教科経営、学校経営のヒントが凝縮されていたんです。

【愛媛師範学校のはじまり

(一八七六年〜)

話を遡ると、一八七六(明治九年)年。現在の松山市役所付近二番町のあたりに師範学校をつくるとうという動きが始まり、同年八月二十一日に開校しました。その後、一八九〇(明治二十三)年には若草町(現在の松山若草総合庁舎の地)へ移転し、新たなスタートを切ります。それから長くその

地に師範学校がありました。昭和二年の地図にもはっきり「愛媛師範学校」と書かれていますね。



【松山空襲の記憶

(一九四五年七月二十六日)

そして、時代が進み——忘れもしませんが、一九四五年、昭和二十年のことです。ここで私自身の体験をお話しさせていただきます。私は一九三七(昭和十二年)生まれで、当時、味酒小学校の三年生でした。忘れもしない一九四五(昭和二十年)年七月二十六日の松山大空襲。父が拾ってきた米軍のピラには「七月二十六日に空襲をする」と警告が書かれていました。しかしそれを大きく知らせることは禁止されていた時代です。「今日は空襲があるかもしれない」父はそう言い残し、警防団へ向かいました。私たちは母と逃げました。逃げる途中、B29の爆音が聞こえてきました。当時食べていた、食用ガエルの鳴き声に似ていて、「ゴロン、ゴロン」と。あの音は今でも忘れられません。松山城の上を旋回したあと、本町四丁目に焼夷弾を落としました。油の匂い、空から降る火。木造家屋は一瞬で燃

え広がりました。私たちはギリギリで難を逃れましたが、母の言った「雨が降るように落ちよる」という声が今でも耳に残っています。翌日、父が煤だらけで戻ってきた姿も忘れられません。お城のふもとまで全部焼けていました。その光景は今でも強烈に覚えています。しかし不思議なことに、周囲が焼けても師範学校の中心部分だけは火が残っていたと聞きました。この体験が、後の教育観にも大きな影響を与えました。

【中庭にある二つの物語】

(一) 師道讃仰之碑の精神

「師道讃仰の碑 碑文」

師道讃仰之碑文

人ノ師タル者ハ須ク厳毅ニシテ寛仁達識ニシテ清高ナルヘシ毫モ鄙吝陋劣ノ心志アルヘカラス然シテ子弟ヲ教フルニ性ニ隨ヒ材ニ應シテ各其ノ徳器ヲ成就セシメンコトヲ要ス是先師山路一遊先生力躬ヲ以テ垂訓シ給ヘルトコロ我等先師ヲ讃仰スル者宜シク斯道ヲ繼紹シテ教学ノ興隆ニ努メサルヘカラス茲ニ勅シテ以テ人ノ師タル者ノ戒トナス

(文意)

人の師として力を尽くし 守るべき道

人を教える立場にあるものは、厳正であり、しかも、心が広く思いやりがあり、広い学識を持ち、心が清らかで優れた人格をもたねばならない。少しでも卑しく劣る心があつてはならない。そして、子供を教える場合、それぞれの性格に沿い、才能に応じて、一人一人の持つ人格や才能を十分に伸ばさなければならぬ。このことは、前代の賢人山路一遊先生が身をもって示して下さった教えである。私ども前代の賢人山路一遊先生の学徳を尊ぶ者は、この教えを受け継ぎ、学校教育の発展に努め



【城北キャンパスへ

(一九四七年〜)

戦災で旧師範学校が焼失し、一九四七(昭和二十二年)年、ここ城北の地へ移ってきました。当時この一帯は歩兵第二十二連隊の「練兵場」でした。日露戦争時にはロシア兵捕虜の収容地になっており、バラック小屋が三十三棟建っていたそうです。ここにはそんな歴史も重なっています。一九四九(昭和二十四)年に新制愛媛大学が誕生。最初にここへ来たのは教育学部でした。

なければならぬ。そのことをここに刻んで、人を教え導く者の戒めとする



碑文を書いたのは林傳次先生（一九三九（昭和十四）年～一九四三（昭和十八）年の愛媛師範学校長）です。その背景には、恩師、山路一遊先生（一九一三（大正二）年～一九二三（大正十二）年の愛媛師範学校長）の教えがあります。山路校長は「学校は先生のためではない、生徒のためである」と説き、それが愛媛師範学校の教育精神の源流となりました。昭和七年、山路校長が亡くなられたとき、教え子たちは、山路先生の教えを形に残さなければならぬと考えました。そして、林先生がその精神を文章にし、一九三七（昭和十二）年、師道讃仰之碑が建てられました。その後、戦後、一九四七（昭和二十二）年に師範学校がここに移ってきて、一九四九（昭和二十四）年には新生愛媛大学が誕生します。この碑は一九六六（昭和四十一）年、愛媛師範学校創立九十周年の年に現在の中庭へ移設されました。実は、師道讃仰之碑は三つ残されて

いるんです。①教育学部中庭にある若草町の旧師範学校の精神を受け継いだもの、②愛媛文教会館のもの、③東温市大和神社のもの。それぞれに建立に至る物語があります。これらは、山路一遊先生、林傳次先生、そしてその教えを受け継いだ多くの先輩方が、後世の教育のために残した精神の結晶なのです。私はこの碑文を丸暗記しています。これは、私が教員として行き詰まったときにいつも立ち返ってきた文章なのです。学級経営で行き詰まった時、教科経営で悩んだ時、そして校長として悩んだ時、必ずこの碑文に戻って何をすべきか考えるきっかけをもらいました。

（二）石井素先生の物語

もうひとつ、一九六六（昭和四十一）年に、大きな話題があったんですね。中庭にある石井素先生の像——この方がどういう生き方をされて、どういう道を通ってこられたのかということも、知っておく必要があるんじゃないかと思うんです。



石井素先生は一九六六（明治二十九）年生まれ。一九一六（大

正五）年に愛媛師範学校を卒業し、松山尋常第五小学校（現在の松山市立新玉小学校）などで教師として活躍されました。その後、東京へ出てさらに勉強を重ね、研鑽を積み、府立第一商業学校で教鞭をとられました。ところが、一九二八（昭和三）年八月、生徒を連れて八ヶ岳へ登山に行った際、激流に落ちた生徒を救おうとして自らも命を落としました。

「子どもの命を守るために命を賭した教師」この出来事は新聞で報じられ、「教師とはどうあるべきか」、日本社会全体に教師像を問い直すきっかけになりました。「自分の命を賭して子どもを救おうとした教師」「このような先生がいるのか」「教師は、ただ知識を教えるだけではない」「子どもを命を守る、人間味あふれた存在であるべきだ」という深い感銘を与えたのです。このニュースは東京や全国に伝わり、教師という職業の尊さを再認識させ、教師像を大きく見直す機運が生まれました。

この知らせが松山に届くと、同期生たちが「顕彰碑をつくらう」と立ち上がり、昭和七年に師範学校の地に胸像が完成しました。しかし、その後、太平洋戦争の時代に、銅でできた像は供出され、台座だけが残りしました。戦後、城北へ移転する時には、台座だけが今の地に運ばれてきたのです。一九六六（昭和四十一）年、創立

九十周年のときに「これではいけない、きちんと顕彰する必要があるだろう」「復元しよう」という声が上がりました。幸い残っていた原型をもとに再び銅像が復元され、今の位置へ据えられました。【若い学生さんたちへ伝えたいこと】

教育学部が最初にこの地へ来たこと。そして中庭にある二つの碑と像に込められた先人の精神。これは本来受け継ぐべき物語です。若い学生さんにぜひ碑文を読んでほしい。ここにある歴史や、素晴らしい先生方の物語——この二つがあつて、今の教育学部があるわけです。それを手渡すことが、先輩である私たちの役目だと思っています。

【質疑応答・まとめ】

先ほど、学校にある碑文や銅像について「知らないというのはいくつか」と言われたことがある、というお声がありました。私も同じ経験があります。やはり、そこにあるものをきちんと知っておくことが大切なのです。教育の現場で悩んだとき、こうした資料を読み返すとヒントが得られます。時に子どもが見せる理解しにくい言葉も、それは「子どもたちの叫び」なんだと気づかされます。「この子は何を訴えているのか」その叫びに耳を傾け聴こう、という姿勢が大事なのだと碑文から私は学びました。「やってみせ、言ってみせて、させてみて……」という

言葉も思い出しながら、子どもたちに寄り添う姿勢が必要だと何度も感じました。

教育とは、先人の精神と実践を受け継ぎ、次へつないでいく営みなのだ、今、あらためて感じています。

以上で話を終わります。本日はありがとうございました。



（謝辞要旨）向 平和教授

本日は、本当に参考になるお話を聞かせていただきました。戦後八十年という節目の年でもありますし、戦時中のお話を直接経験された方からうかがうことができるというのは、非常に貴重なことです。

また、学生の皆さんには、自分の母校や地域の歴史をしつかり学んだ上で、国際社会へ出ていくことの大切さを感じてもらえればと思います。

ご講演いただきました菅田さんに、もう一度拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

第16回 愛媛大学ホームカミングデイ

令和7年11月8日(土)、城北キャンパスにおいて「第16回愛媛大学ホームカミングデイ」が開催されました。ホームカミングデイは、卒業生の皆様や退職された教職員の方々を本学にお迎えし、本学の施設や学生祭の見学及び在校生や教職員との交流などを通して、母校への理解を深めることを目的としています。

【式典の様子】

式典は、教育学部卒業生の合田みゆきフリーアナウンサーの進行によって進められました。はじめに、オープニングセレモニーとして、愛媛大学邦楽部による演奏があり、9名の部員が「フューチャー」などを披露してくれました。

続いて、仁科弘重学長の挨拶と「国立大学の現状と将来像」についてご講演をいただきました。



講演される森脇教授



講演される隅田教授

特別講演は、工学部部長森脇亮教授と教育学部附属才能教育センター長隅田学教授、睡眠医療センター長の岡靖哲特任教授が「睡りのサイエンス」と題して、睡眠のメカニズム等について講演されました。

1日の3分の1を占める睡眠の大切さについて改めて考え直す良い機会となりました。講演後は、フロアからの質問にも分かりやすくお答えいただきました。

続いて、愛媛大学基金感謝状贈呈が行われ、昨年度、愛媛大学基金に多大なご芳志を提供いただいた方に学長から感謝状をお贈りしました。その後、愛媛大学合唱団による合唱コンサートでルパン三世のテーマ曲など2曲を披露し、最後に合唱団と会場の皆様で学歌斉唱を行いました。

【懇親会の様子】

懇親会は大学生協食堂1階に場所を移して行われ、高橋祐二校友会会長よりご挨拶をいただいた後、「えみかビール」で乾杯し、立席形式で懇親を深めました。また、恒例の大抽選会も開かれ、番号を呼ばれる度に参加者は一喜一憂して盛会のうちにホームカミングデイを終えました。



令和7年度第75回愛媛大学学生祭 アラカルト

令和7年度の学生祭は、11月8日(土)・11月9日(日)の両日に「彩り」をテーマに開催されました。今年は、教育学部2号館と4号館前が工事で使えないため、体育館横の駐輪場も使うなど例年と違ったバザーブースの配置となりましたが、来場者の数も増え、活気のある大学祭となりました。

正門では、例年と同じに第75回愛媛大学学生祭と書かれた黄色のアーチと実行委員会手作りの看板が迎えてくれました。

アーチをくぐって中に入ると、多くの人が行き交い、その上学生たちの呼び込みの音が響渡ってバザーの熱い熱気が伝わってきました。

以下、その様子を紹介いたします。



南加会館前



法文学部本館・共通講義棟B前



芝広場



工学部本館・1号館前



教育学部本館前



教育学部タイサンボク通り



ミュージアム前



バザーブースは、定番のたこ焼きや焼きそば・おでん・うどんに加え、クレープやピザなど最近のトレンド商品を販売する所が多くありました。今年は、だんごの販売ブースが多かったように思います。もちろん、食べ物関係ばかりではなく来場者自身が作品等を作る体験コーナーや外部団体による取り組み紹介、教室を開放してのゲームコーナー、学生サークルによる日々の取り組み発表など様々な催し物がありました。

構内を巡って学生たちに話を聴く中でこの大学祭はサークルの仲間たちと意見を出し合い工夫を凝らし、当日を乗り切ることで仲間意識が芽生え、成就感・達成感が味わえる、大学生活の中で一番思い出に残る行事だと感じました。個人的にも50年近く前の若かりし頃の大学生生活を思い出しました。

会員の皆様もぜひ来年のホームカミングデイにご参加いただき、同時に開催されている学生祭に立ち寄られてご自身の大学生生活を思い出していただければと思います。

先輩を偲ぶ

あしあと (14)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋)



真の理解者、林伝次先生

愛媛県師範学校

竹葉 秀雄氏寄稿

(大正一一卒)

私の師範学校四年間は全く悩みの中にあつた。宇和島中学二年の時、校外寄宿舎から校内の道場に通っている途中、どうしたことか忽然として周囲のすべてが、光り輝いたのだ。(少し表現が強すぎる。これをうまく書き得ないのだが)黎明の光りではない。私はこの事実をどう考えたらよいのか、全く途方にくれてしまった。これからの中学、続いている師範学校の生活の全部は、この光りに取りつかれてしまつて、これを解決しよ

うとする必死の生活であつた。「入學口頭試問のとき、『なぜ師範を受けるのか』の問いに対してお前は『皆が行けと言われますから。』と答えたよ。」とときどき笑つて言われた。私は図書室に行つて、いろいろな書物を読んだけれども解決がつかない。深い神経衰弱におちいった。城山に登ると、あの石垣の上から飛び下りようかと思ひ、電車のレールに飛び込もうかと思つたりした。この私の悩みを四年間じつと見つめていて下さつたのが林伝次先生であつた。四年卒業のときであつた。「竹葉、自分のうちに来い。二人で自炊生活をしよう。」と言われた。それま

でも近くに下宿をとつて下さつたのであつたが。先生が炊事、私が掃除を受けもちの生活がはじまつた。先生にこしらえてもらったお弁当を持って、石手川の堤、久万台の赤土の丘の草原に坐して、瞑想し、書物を読んだ。外から見れば、ずるい生徒であつたであろう。しかし私にとっては毎日毎夜必死の生活であつた。

私は少し前、湊町の向井書店で、小雑誌を手にして感動をおぼえた。それが「新しき村」であつた。そして先生の書架で「白樺」を見出し、その中の武者小路実篤先生の「第三の隠者の運命」を読み、さらに深い感動をおぼえた。それから私の読むものは白樺派のものとなり、トルストイ、ドストエフスキーなどに向かつた。

先生は「きょうも学校に行かなかつたのか。」と言われるだけで、「行け」とは一言も言われなかつた。先生はだれかに「竹葉は青山半蔵(当時中央公論か改造に島崎藤村の『夜明け前』の中の主人公)のようになる恐れがある。」と、もたらされたさうである。先生

は私に碁をすすめ、酒もすすめ下さつた。これは卒業後のことであろう。(早く学校をやめた私には、よく松山に来て自分の家に泊まり込んだ。)今はつきりと覚えていることは、ある日学校から帰られた先生は、「竹葉、今夜おれについて来い」と言われ、食事をすますと先生について出かけた、そこで見たものは沢正の机龍之介であつた。これに感激し、世の中にはこんな世界もあるのかと、一歩広い世界に目がさめたのであつた。学校は観劇を禁じていたのである。

「竹葉、きょうも決まらなかつたよ。」私の卒業のときである。平均点はやつと六一点あつたが、私の外の生活を見て不まじめと受けとつていた先生方は多かつたのであろう。無理もない、白紙で出した答案もあり、詩を書いて出した答案もあつたのだから。四年間ぶつとうして受けもつていただき、ことに同居生活をしている私のことである。先生の思ひはいかばかりであつたであろうか。三日目のこと「竹葉、卒業できたよ。

山路校長が最後に『竹葉のことは私に任せ』との一言で決まつた。すぐお母さんに手紙を書け。」とのこと、先生も書いて下さつたよ。うだ。私は母に「卒業できないかもしれない、が心配されないように、私は行きたいところがあるのですから。」と書いて送つていたのである。私の行こうと思つていたのは日向の「新しき村」であつた。

「我が教え我がすべて」とは先生の山路校長の下にきたつて、その崇高な精神に感激し、私らの組をもつての先生の言葉である。私と同じように皆に對せられた。ただ私が穏やかでなかつたために以上のようなことがあつたのだ。山路校長、林先生をもつた私たちはすばらしい善縁である。善縁は生かされねばならぬ。彰徳碑の建設もその一環である。



二期生回顧

愛媛大学教育学部
平原 泰三氏寄稿
(昭和二十九卒)

入 学

昭和二五年。戦後の混乱がまだ
続いており、軍隊靴のかつ歩も、
珍しくなかつた時期でもありまし
た。

新制大学の制度が発足したばか
りでもあり、入学式も五月に入っ
てからではなかつたかと思いま
す。私たち教育学部二期生(四年
課程)は、初・中等科を合わせて
七〇名ほどでありました。

一般教養課程

当時、旧文学部の本部が置か
れていた旧制松高の校舎(現在、
この跡には附属中学校が建てられ
ている)で、大学生生活の前半を過
ごしたわけです。先年、亡くなら
れた森義孝、相原正一郎先生など
のお元氣なご指導を受けたものこ
の期間でありました。

男女共学

小学校入学以来、男女共学とい
うことを知らず、大学に入つて、
はじめてこの恩恵に浴したのも、



小春日和 (教育学部本館前)

私たち二期生の淡い思い出の一つ
であります。当時、愛媛大学にも
女性の進出はありましたが、二期
生(四年課程)の中には、紅二点
の存在を認めるだけでした。

専門教職課程

教育学部生のひとりとして、
やつと城北の校舎に移り、専門課
程に取り組んだ後半の時期に当た
ります。



教 育 実 習

広大な旧練兵場跡にぼつんぼつ
んと点在していた教育学部の校舎
群。おそまつな木造校舎ではあり
ましたが、教育学部生としての意
識を高めたのは、何といつてもや
はりこの時期ではなかつたかと思
います。

学部本館前に建てられていた山
路一遊先生の「師道鑽仰之碑」の
前で、車座になり、日長な春の一
日、教育実践についての議論をた
たかわせたことも、つい昨日のよ
うな気がいたします。

教育実習

教生としてはじめて、附属中学
校(当時は教育学部と道路一つを
隔てた城北にあった)で、生徒た
ちにあいまみえた期間でありま
す。元氣はつらつとした附中生の
中に、かつての自分たちの姿を見
い出しながらも、授業研究に悪戦
苦闘した期間でもありました。そ
の反面、各教科ごとにそれぞれ堪
能な指導教官を得て、教育技術は
もちろんのこと、教師と生徒、教
師と教師の人間関係づくりについ
てまでもご教示をいただいたこと
は、今なお忘れがたいものであり

ます。

卒 業

昭和二十九年三月二〇日、四か年
にわたつてお世話になつた学窓を
単立つた日であります。三月とは
いえ、肌寒い一日でありました。
しかし、心は赤々とほむらを上
げていたことを今でもはつきりと思
い起こしております。あの日、文
理学部講堂横で撮影したらしい古
い写真には、卒業証書を片手にし
た二期生、七〇余名中、五九名の
童顔がほほえみかけています。

二〇二年昔

二期生である私たちが教職につ
いてから、早くも二昔の歳月が流
れ去っております。思えば、二〇
有余年前、学生祭前夜祭のあのか
がり火の中で、ともに肩を組み
合つて、声高らかに歌つた「……
希望に燃える君と吾、高き理想を
語らなむ……」の歌詞そのままに、
あの情熱を、いつまでも愛媛教育
界の躍進向上のために燃やし続け
ていきたいと願っているものであ
ります。

こころ常に師道を離れず



会員の声

「ちよボラ」で人生を豊かに



寺尾 満寿男
(昭四九卒)

はじめに

「ちよボラ」とは「ちよつとボランティア」の略。ボランティア活動といえば、愛媛大学合唱団で歌っていた頃で、二つのことが浮かぶ。一つは、団員仲間が手術をするというので、献血をしたことだ。手術は成功して、皆で大喜び



合唱団で歌っていた頃

した。もう一つは、重信にある特別支援学校を訪問したことだ。ギター片手に、子どもたちと歌ったり踊ったりして交流を深めた。ま

ぎれもなく、あの時の子どもたちの澄んだ目と笑顔は、教職への引き金になった。

青少年赤十字との出会い

教員になり、特別活動主任をしていた時、青少年赤十字（JRC）



新採の頃

を知った。生徒会活動など奉仕活動がマンネリ化していた時、貴重なアイデアや人材を提供してくれ

たのが日赤愛媛県支部だった。さすが、ボランティアのプロ集団。ソフト・ハード面が充実しており、その活動は全国、全世界にまたがる。



トレセン

特に記憶に残るのが、トレセン

（青少年赤十字小中高合同トレーニングセンター）や青少年赤十字指導者講習会での二泊三日の研修だ。子どもたち、教員仲間、日赤支部の職員の方々と同じ釜の飯を食べたことは、人生でかけがえない触れ合い体験となった。また、ともに楽しんだレクリエーションやフィールドワークで救急法など

を学んだことは、後の教員生活に随分役に立った。

学校運営にJRC目標を

青少年赤十字の態度目標は「気づき考え実行する」で、実践目標は「健康・安全 奉仕 国際理解・親善」の三つだ。私が校長の時は、態度目標を学校の教育目標に掲げて、三つのことを実践した。児童生徒の全ての活動が、この目標に集約されると考えたからだ。

例えば、廊下にゴミが落ちていたらとしよう。生徒は、「ゴミ」に気づき、「拾えば綺麗になる」と考え、「ゴミ箱へ捨てること」を実行する。ただ、ゴミに気づかない生徒がいることも事実だ。「気づかせること」は本当に難しい。



青少年赤十字指導者講習会

学校教育の中で、この「気づき」を与えることが教師の役目ではないかと思う。

JRC賛助奉仕団での活動

退職後も愛媛県青少年赤十字賛助奉仕団の一員として「ちよボラ」を実践している。新型コロナ禍でも、感染対策を万全にして学校訪問や児童生徒向けの資料作りに取り組んできた。その時の様子を紹介したい。

新型コロナ禍が教えてくれたもの。それは人との出会いのすばらしさ。幸運にも感染が下火の時、赤十字のシンボルツリーである糸杉の「植樹祭」と赤十字の目標（人道・博愛）の「啓発資料」の作成を通して、すてきな出会いを経験した。

一 いとすぎ植樹祭

まずは植樹祭での子どもたちや先生方との出会い。学校に一歩入るなり笑顔の挨拶をもらう。もうそれだけで「来てよかった」と思い、喜んで体育館などで歌やクイズを交えて赤十字の起りや糸杉植樹の由来を説明したり、校庭で植樹したりする。そこには熱心に



糸杉植樹の様子



学校での講話（糸杉植樹の由来）

話を聞いてくれたり、進んでス
コップなどを使って糸杉の苗や標
柱用の穴に土入れをしてくれたり

する学校の皆さんがいて感激にひ
たる。

二 資料作り

次に読み物資料「瀬戸内の風に
包まれて―エルトゥール号の話
から―」の取材で串本町を訪れた
時に出会った人々。トルコ記念館
では係りの方が日土友好の歴史の
話とともに展示品の説明をしてく
ださった。そばには日赤平国際
救護発祥の地碑が立っていた。近
隣の大島小学校では教頭先生から
今も続く児童による遭難慰霊碑清

掃の話をお聞きしたり、町役場
では課長さんから貴重な資料をいた
だいたりした。

すてきな出会いは、今後の活動
のカンフル剤であり一生の宝物で
ある。

おわりに

現在、JRC賛助奉仕団の活動
の他にも①町内会長②近隣の中小
学校の学校運営委員③町老人会役
員として、ちょボラを楽しんでい
る。①では、町内のどぶさらい、
ゴミ拾い、草抜きなど。②では、
休日の学校園での水
やりなど。③では、
一人暮らしの方のサ
ポート事業（雑草狩
りや網戸の修理）な
ど。

瀬戸内の風に包まれて
―エルトゥール号の話から―



来島海峡

読み物資料（表紙絵）

ちょボラをした後
の爽快感や充実感
は何物にも代えがた
い。愛大合唱団で初
めて体験したボラン
ティアの楽しさが活
動の根源だ。人生の
幕が下りるまでちょ
ボラを実践したい。

表紙作品について



村上 朋子
(昭三九卒)

唐の詩人、沈佺期の作で

巫山高不極
合沓狀奇新
暗谷疑風雨
陰崖若鬼神
月明三峽曉
潮滿九江春
爲問陽臺客
應知入夢人

この四十字を書いています。

巫山高不極
合沓狀奇新
暗谷は風雨かと疑われ
陰崖は鬼神の若し
月は明かなり
三峽の暁
潮は満つ九江の春
爲に問う陽臺の客
應に知るべし
夢に入るの人

中国の巫山の勝を詠んだもので
す。第七十三回秋季県展で特選を
いただきました。

私が書を習い始めたのは十年前
です。教職、その他諸々のお役を
退き、身も心も軽くなり、人生の
締め括りとして打ち込むものがほ
しくなり、書道教室の門を叩きま
した。書の深さ、おもしろさを追
求する楽しさが少し分かってきた
ように思います。

「型より入りて型を出る」は書
の要諦。これを学び追求しなが
ら、書に終わり無し、書くことを
楽しみたいと思っています。



大拙・英訳「教行信証」の研究(三)



吉原 宏文
(昭四二卒)

① はじめに……

私の両親は、広島県下の田舎の教育者であった。父は、若くしてその人望を認められ、ペスタロッチを鑑仰し、また、剣道の達人でもあり、長年、戦前の青年学校長、戦後の中学校長を務めた。母は、三原女子師範卒の小学校教師であった。私はその長男である。併し、父は再婚で、先妻の二人の姉との確執によって、母が一時期大変苦しみ、私の中学生時代、二度、悲しい事件を起こした。多感で情緒不安定な中学生の私にとって衝撃であった。その後、父の退職を期に、広島市内に住むことになった。何とか、広島県立国泰寺高校に進学したものの学力と体力の欠乏によって苦しんだ。当時、偶然、本屋で見つけた「禅に生きる」という澤木興道老師の半生を描いた一冊の本が、私の人生を

決定づけた。愛媛大入学後、即「仏教青年会」に入会した。近くの禅寺・龍泰寺の早朝坐禅会に参加した。両親が教育者だったことにより、何となく教育学部を選び、初等教育課程に進んだ。ただ、小学校課程は学ぶ教科が多様で、その全部をマスターするには、知力のみならず体力が必要である。爆の後遺症で軟弱な身体は、小学校課程の免許を取るのが精一杯であった。とはいえ、「教育とは何か?」と学問としての教育学には大変魅力を感じ、長田新先生の「教育哲学」を読んだ。同時に、総合大学として他の学部生との集合体でもあった「仏青」の顧問であられた、松本解雄先生が私淑された親鸞聖人の教えを聞き、また愛媛新聞が縁で、戦前の台北帝大で仏教哲学の教授であられた升田栄先生に感化された。従って、

教職課程の学習が疎かになり、愛媛と広島両県の教員採用試験に失敗し、大阪府に行くことになった。そこで、茨木市立中条小学校に非常勤講師として赴任した。小三年生の担任であった。その中の一人、個性豊かな鳥飼達夫君がいた。彼が後々驚異的エンターティナー(entertainer)に変貌した「嘉門(達夫)タツオ」である。私も初めての教員生活であったため、四十数名の児童達と体当たりで授業に臨んだ。併し、二年間で広島県に逆戻りした。両親の七光で、広島市内の地に恵まれた小学校に赴任したが、そこでも二年で退職した。当時、作家・三島由紀夫氏の、日本中を震撼させた大事件があり、同僚の先生から「吉原先生の行動は三島に似ているよ」と言われた。実は、教員になってからも密かに佛教大の通信教育で仏教の勉強を続けていたのである。その卒業を期に、大学院を受験し合格したので、関係者の猛反対を尻目に京都に舞い戻った。そこで、澤木老師の高弟・村上光昭老師の紹介で、京都大の荒牧典俊先生の指導を仰ぐこととなった。そして佛大の修士論文「業の主体」に

纏めることができた。併し、佛大(浄土宗)との縁も切れ、偶々、東京・明静会の堀春水先生の大坂講演の後、個人指導を受けることができた。そこで「罪障消滅の願をもって仏道に入ったようですね。一つ殺傷した因縁諸霊の供養をしようという誓いと、本当の真実の世界を知ろうという願いがたっているようですね」といわれた。守護霊がお父さんで、観世音菩薩が守護するでしょうと言われた。その後、先生の薦めで、浄土真宗の僧侶として得度することとなった。

かくして、短い小学校教師生活であったが、一番の欲びは、教育哲学者・宮城教育大学初代学長・林竹二先生と邂逅したことであった。本やTVによる間接的な出会いであったが、日本の最高の教師であったと今も信じている。東北大教育学部のギリシャ哲学者でもあられた先生は、「哲学のない教育は教育の自殺である」また「教育を誤ると国を亡ぼす(教育亡国)」などの名訓諷を残された。特に小学校教育が最重要であると

も。かくして、罪悪深重の私は、その負債を支払うため大苦悩を体験することになったが、今、国立大として度量の大きな愛媛大同窓会に救われた思いである。私の修行はまだまだ続いて行く……

* * *

② 顕浄土真実行文類二 愚禿釈親鸞集

諸仏称名の願(浄土真実の行・私は、往相の回向を崇めて思案するとき、その中に、大行^①と大信^②のあることに気づく。大行とは、無碍光如来の名前を発音すること(称名)である。この行の中に、善本(全ての善なる法)が撰めとられ、そして徳本(全ての功德の本)が具えられている。それは、その名前が発音されるや即座に完成される。称名は、真如の絶対的実在から自然に生じる功德の宝海である。その結果大行と呼ばれる。この大行は、大悲の願(絶対的な深い同情の祈り・第十七願)から出てくる。それ故、諸仏称揚の願、また、諸仏称名の願、また、諸仏咨嗟(讚嘆)の願、また、往相回向の願、そして、選択称名の願(称名が優先され

る願」と名づけられる。

諸仏称名の願に関して、大無量寿経（永遠の生命についての大きな経）において我々は見出す、即ち、「設い、私が仏道修行を成就（完成）しても、十方世界の無量の諸仏が、満足の意を表して（approvingly）、私の名前を称えなかったなら、私は正覚をとりません。また、仏道の完成に達しても、私の名前が十方を超えて（名声 超十方）、一番最後に、それを聞かなかった者が一人でもいたなら、私は正覚（仏の命）を捨てましょう。私は衆生のために、宝蔵を開き、功德の価値ある内容（名号）を、広く各自に割り当てるであります。私は、常に大衆とともに仏法を語り、説法獅子吼するであろう（仏の説法をライオンの吼える声に喩える）。

願成就に関連する経の引用文。ガンジス河（Ganges・洹河）の砂と同じ、無数の諸仏如来が満場一致で（unanimously）、無量寿仏の威神（畏敬の念を起こさせ尊厳）と不可思議な（想像もできない）功德を讃嘆しておられる。また、無量寿仏の威神は限界を知

らない。その数が無量（絶大で、無辺（無限で）、不可思議（想像もできない）な十方世界の諸仏如来が一緒になって彼を誉めたたえている……。

その仏陀の本願の美德（本願力）の名号を聞いて、彼の国（極楽浄土）へ生まれたいと思うものは、皆悉く、彼の国に到達して、自ずから不退転に至る（絶対に逆戻りしない）という信樂（信心）を獲得することになる。

「無量寿如来会」に言われている。今、如来の御前において、私（法蔵菩薩）は、普遍的救済の祈りを宣言します。私は、至高の悟り（Bodhi 菩提）に導くための有効な原因を成就するであります。若し私が諸々の上願（すぐれた願・四十八願）を満足しなかったなら、私は十力^③の比類のない（peerless）尊者とならないでしよう。絶えず修行に没頭する能力がない人々は、快く、私の名前の功德（名号）を共有するであろう。それによって恵まれない人々は、全ての必然的な苦しみを経減されるであろう。世間の人々は、あらゆる仕方（利益（幸せ）を与えられ、安楽（幸福な状態）

に導かれるであろう。私、最勝丈夫（最もすぐれた勇氣あるもの）として、自己を律し、完璧な人になり貧窮（恵まれていない哀れな人々）のために伏蔵（地下に埋蔵されている宝・宝の家）になるであろう。善法を円満した私と等しい者（等倫）はいない。それだから、私は大衆の中において獅子吼するのである。

「ああ阿難よ！こうゆうわけ（義利）で無量・無数・不可思議・無有等等・無辺世界の諸仏如来は、みなともに加わって無量寿仏の所有しているあらゆる功德を称讃して（ほめたたえて）おられるのです。」 以上

註①（大行・真実行）大行とは、第十七願に誓われた諸仏讃嘆の名号をいう。大行の大には、大、多、勝の三義がある。則ち、広大、多量、最勝の意味で、行の徳用を表している。「行巻」に大行と名づけるわけを明かして「もろもろの善法を損し、もろもろの徳本を具せり」といわれたのは無量の徳で多の義にあたり、「極速円満す」は勝れた用徳で勝の義、「真如一実の功德宝海

なり」は広大無辺な真如にかなう性徳で、大の義に当たる。行とは、一般に教・行・証という場合の行は、梵語のチャリヤー（charita）の漢訳で、菩提、涅槃に至るための行為を意味する。大行とは、真如にかなない、無量の徳をもち、衆生をすみやかに涅槃に至らしめるすぐれた行業（おこない）のことで、真実行とも言われる。

註②（大信・真実信）大信とは、阿弥陀如来よりたまわった信心の徳をたたえた言葉である。信心とは、信樂ともいわれ、無疑心のことであつて、疑心なく本願の名号を領受した心を用い。それは、大行たる名号のはたらきが衆生に正しく至り届いたすがたである。

註③（十力無等尊）十種の力をそなえてならびないので無等尊という。
〔十力〕仏が具えている十種の力
（一）処非処智力。道理・非理を知る力
（二）業異熟智力。業とその果

報との因果関係を知る力
（三）静慮解脱等持等至智力。禅定や三昧を知る力
（四）根上下智力。衆生の能力や性質の優劣を知る力
（五）種種勝解智力。衆生の意欲や望みをあきらかに知る力
（六）種種界智力。衆生の本性を知る力
（七）遍趣行智力。衆生の人・天等の諸世界に趣く行の因果を知る力
（八）宿住随念智力。自他の過去世のことを思い起す力
（九）死生智力。衆生の未来の生死・善悪の世界を知る力
（十）漏尽智力。煩惱の滅した涅槃の境地と、それに到達するための手段を知る力
（明静庵主）

二〇二五年（令和七年）

八月六日（水）平和記念日

731-0135

広島市安佐南区長束一丁目十八ー五



新会員より

コロナ後の大学生活と

私の成長

小学校サブコース四回生

和田 哲汰

私の大学生活は、いわゆる「コロナ後」に始まりました。新型コロナウイルスの流行によって多くの学生がオンライン授業を余儀なくされ、キャンパスでの交流が制限されていたと聞いていました。しかし、私が入学した頃には感染状況も落ち着き、対面授業や行事が徐々に復活していました。そのため、大学生生活のスタートから比較的自由に充実した日々を送ることができました。

私は県外から一人暮らしで大学に通っていたため、人とのつながりを作れるのが非常に不安でした。知り合いもいない土地で新生活を始めることは心細く、孤独を感じることもありました。しかし、対面授業が再開していたおかげで、同じ授業を受ける仲間と自然に会話が生まれ、気づけば現在でも交流を続けるほど仲の良い友人を得ることができました。もし完全にオンライン授業のままであったら、このような人間関係を築くことは難しかったと思います。

人と直接会えることのありがたさを強く実感しました。

また、学校現場でのボランティア活動も再開され、子どもたちと直接関わる貴重な機会を得られました。子どもたちの笑顔や純粋な反応に触れることで、自分自身も多くのことを学び、将来の進路について考えるきっかけにもなりました。しかし、すべての活動がコロナ前と同じではありませんでした。サークルや部活動では活動に制限が残る、思うようにできない部分があったと先輩方から聞きました。また、マスクの着用が必須で、同じ学部の人顔を覚えることが難しく、会話をしている表情が分からないという不便さもありました。こうした制約は、コロナ禍を経験した世代ならではの悩みだったと感じます。

一方で、コロナ禍によってもたらされた良い変化もありました。第一に、オンライン学習の普及です。授業の一部は録画され、パソコン一つでどこからでも学習できる環境はとても便利でした。特に試験前には動画を見返し、理解を深めることができる点が大きな利点でした。第二に、人とのつながりの大切さを再認識できたことです。アルバイトやボランティア、友人との旅行など、人と一緒に時

間を過ごす活動が再び可能になり、以前よりも人とのつながりに強く喜びを感じました。制限から解放されたからこそ、人との関わりがどれほど大切でかけがえのないものかを深く理解できたのだと思います。

こうして振り返ると、コロナ後から始まった私の大学生活は、単なる日常の回復ではなく、制限から解放された喜びと新しい学びの形の両方を体験できる貴重な時間でした。従来の制度の良さを守りながら、時代の変化に応じて柔軟に対応していく必要があることを、私は学習面でも生活面でも実感しました。この経験を大学時代に積めたことは、私にとって大きな財産です。将来社会に出たときには、変化を前向きに受け入れ、柔軟に行動できる人間でありたいと強く思っています。

人との出会いに支えられた四年間

特別支援教育コース四回生

藤村 小桜

私は、友達や兄弟との関わりを通して「一人ひとりの個性を大切にできる教育とは何か」を考えるようになり、教育について調べていく中で、特別支援教育と出会いました。子どもたちの特性や個性にあったオーダーメイドの教育を行っていく点に魅力を感じ、特別支援学校の教員を目指して愛媛大

学教育学部の特別支援教育コースに進学しました。

入学後は、継続した教育活動に取り組みたいと思い、「久米わくわくチャレンジサタデー」(通称わくチャレ)に参加しました。初めは不安で、子どもたちともうまく話せませんでした。先輩の姿を見ながら、少しずつ積極的に関わるようになりました。遊びや授業を企画するようになると、子どもたちにとって「やってみたい」と思える活動を考えることに喜びを感じるようになり、教員としてのやりがいと面白さを実感しました。また、わくチャレの活動を、地域の方や教員の方に発表する機会をいただいたことがきっかけで、大学での勉強とわくチャレでの実践を繰り返すことで成長していることに気が付きました。自分とは異なる立場で教育に携わる方々とお話したことで、様々な人と協力して、子どもたちを育てていく環境を作れる教員になりたいと思うようになりました。

さらに、課題研究支援事業に携わり、松山南高校理科の生徒に講話や、課題研究計画書の添削、研究のアドバイスをを行いました。高校時代に課題研究に取り組む中で、悩んだことや学んだことが、少しでも役立てればと思っ参加させていただきました。高校生が自分の抱えている悩みや不安、疑問に思っていることを話してくださり、自分の経験が誰かの役に立つ喜びを感じました。研究を見てい

く中で、私も知らないことがたくさんあり、毎日、驚きの連続でも興味深かったです。トビウオが滑空する様子に驚いてトビウオの翼を調べていたり、イチヨウの葉を使って虫除けを作ろうとしていたり、どの研究もわくわくするものでいっぱいでした。好きなことや得意なことを行うことが、子どもたちの成長をより促していると感じ、好きなことや得意なことを切り口にした学習は、どの子にとっても重要であるということを感じて実感しました。

大学生になり、様々な人と関わる中で、自分とは異なる視点から考えるようになり、視野が広がったなと思います。また、人とのつながりが、挑戦を後押ししてくれて、自分を成長させることが出来ました。

現在は、知的障害のある子どもたちの算数科の指導について卒業研究を行いながら、大学院進学に向けて勉強を行っています。大学院卒業後は、家族や地域、様々な教員の方々とともに、子どもたちの可能性を広げることのできる教員になりたいと思います。

充実した学びとたくさんの人との出会いを通して、自分らしく生きる力を育んでくれた愛媛大学に、心から感謝しています。ご指導してくださった先生方、関係者の皆様、地域の皆様、ありがとうございました。

愛媛大学教育学部同窓会 支部活動支援金交付要綱

第1条

【目的】

この要綱は、愛媛大学教育学部同窓会（以下「愛教同窓会」という。）会長が、「愛教同窓会」活動の振興と支部活動の活性化を図るため、各支部及び支部に属する会員が行う自主的な活動に対して、予算の範囲における支援金交付に必要な事項を定めるものとする。

【支援金申請者】

第2条

本事業の申請者は、支部長とする。

第3条

【支援金対象事業及び支援額】
本事業の対象となる事業活動及び支援金額は審査会（常任理事会）において審議する。

第4条

【支援金申請手続き】
本事業支援金を受けようとする支部及び支部に属する会員は、「愛教同窓会」会長が定める期間内に、下記書類を「愛教同窓会」事務局に提出しなければならない。

- (2)(1) 支部活動申請書（様式第1号）
- (2) その他、必要と認める添付書類

第5条

【支援金の交付決定】

「愛教同窓会」会長は、前条の規定による申請を受理した場合、その内容をすみやかに審査し、常任理事会の意見を聞いて支援金の交付を決定するものとする。

2

【支援金の交付請求】

支援金の交付決定を受けた申請者は、すみやかに支援金交付請求書（様式第2号）を「愛教同窓会」会長に提出しなければならない。

第6条

【支援金の支払い】
「愛教同窓会」会長は、申請者から交付請求書の提出があった場合、書類受理後常任理事会を経て交付する。

第7条

【活動実績報告および決算報告】

支援金を受けた申請者は、支援事業の交付決定にかかる年度の11月30日までに、下記の書類を「愛

第9条

「愛教同窓会」会長に提出しなければならない。

- (1) 支部活動報告書（様式第3号）
- (2) 会報掲載のための原稿（A4用紙1枚）

【交付の取り消しまたは返還】

「愛教同窓会」会長は、次の各号いずれかに該当する場合は、交付決定の全部または一部を取り消し、支援金の全部または一部を返還させることができる。

- (1) 支援金の交付申請に不正の事実があったとき
- (2) 支援金を目的以外の用途に使用したとき
- (3) 支援事業を中止したとき
- (4) 支援事業を遂行する見込みがなくなったとき
- (5) この要綱に違反したと認められたとき
- (6) 実績額が支援金交付額に満たないとき

第10条

【その他】
この要綱に定めるもののほか、支援金交付に関する必要な事項は、「愛教同窓会」会長が別に定める。

(様式第1号) 年 月 日
愛媛大学教育学部同窓会 会長 高橋 治郎 様
愛媛大学教育学部同窓会 支部長 支部 印

| 愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金申請書 | | | | |
|--|---|-----|---|----|
| 支部名 | | | | |
| 活動名 | | | | |
| 活動予定日時 | | | | |
| 参加会員数 (予定数) | 現職 | その他 | 人 | 合計 |
| | 〇 | 〇 | | |
| 支部の活動目的・内容 (活動目的・内容をできるだけ簡潔に記入 ※詳細は計画書添付のこと) | | | | |
| 目的 | | | | |
| 意義・効果 | | | | |
| 内容 | | | | |
| 予算書 | | | | |
| 本件連絡先 | Email: dookai.ed.shimo@gmail.com TEL: 089-927-9383(月・水・金の午前中) | | | |

(様式第2号) 年 月 日
愛媛大学教育学部同窓会 会長 高橋 治郎 様
愛媛大学教育学部同窓会 支部長 支部 印

| 愛媛大学教育学部同窓会支部支援金請求書 | | | | |
|-----------------------|----------|-----|-----|------|
| 活動名 | | | | |
| 活動日時 | 年 月 日() | : | ~ | : |
| 請求金額 | | | | |
| 一 金 | | | | |
| 上記金額を支部支援金として請求いたします。 | | | | |
| 代表者(担当責任者名) 印 | | | | |
| 振込先 | 金融機関名 | 支店名 | 口座名 | 口座番号 |

(様式第3号) 年 月 日
愛媛大学教育学部同窓会 会長 高橋 治郎 様
愛媛大学教育学部同窓会 支部長 支部 印

| 愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金報告書 | | | | |
|--------------------------|---|-----|---|----|
| 支部名 | | | | |
| 活動名 | | | | |
| 活動予定日時 | 年 月 日() | : | ~ | : |
| 参加会員数 (予定数) | 現職 | その他 | 人 | 合計 |
| | 〇 | 〇 | | |
| 報告内容 (全体の様子や会員の様子を簡潔に記入) | | | | |
| 活動の様子 | | | | |
| 会計報告 | | | | |
| 本件連絡先 | Email: dookai.ed.shimo@gmail.com TEL: 089-927-9383(月・水・金の午前中) | | | |



愛媛大学教育学部同窓会からのお知らせ

愛媛大学教育学部同窓会報投稿に関するお願い

愛媛大学教育学部同窓会事業の一つに「教育学部同窓会報」の発行があります。会員相互の親睦向上を図るために多くの会員の方に投稿していただきたく、以下のことにご協力のほどお願い申し上げます。

【投稿について】

会報への投稿は、事務局から依頼する「依頼投稿」と会員の方が直接事務局に投稿する「自由投稿」があります。

1 「依頼投稿」

依頼投稿は、基本としましては現職会員を対象として事務局から各支部長を通して依頼します。また、会員の参考となる教育実践及び活動等については、編集委員会の承認を受けて直接会員・準会員に依頼することもあります。

2 「自由投稿」

自由投稿は、会員（同窓会会則参照）であれば誰でも投稿できますが、会報ページ数調整のため事前に事務局への掲載希望の連絡が必要です。

【自由投稿について】

1 自由投稿のジャンル

自由投稿のジャンルは特に定めていませんが、以下のことをご参照ください。

- ① 愛媛大学教育学部の歴史的背景、重要性に関する内容であること。
- ② 愛媛大学、愛媛大学教育学部の広報活動や最新情報及び教育学部同窓会を紹介する内容であること。
- ③ 会員の日々の教育活動に関することで今後の実践への示唆を示す内容であること。
- ④ 会員の日々の生活、趣味活動（絵画、俳句、写真等）、同期会、同級会に関する内容であること。
- ⑤ 会員の個人調査・研究によるもので幅広く社会に展望する内容であること。
- ⑥ その他、編集委員会で協議され承認を受けた内容であること。

2 投稿の条件

- ① 公平性を確保するため自由投稿は各会員年度内1回とし、基本連続掲載は認めないものとします。ただし、編集委員会が認めた内容については連続掲載を可とする場合があります。
- ② 投稿希望者が多数の場合は、新規希望者及び掲載数の少ない希望者を優先します。
- ③ ページ数に余裕のない場合は掲載できないことがあります。その後の掲載の可否については編集委員会で決定します。

3 掲載手続等の遵守

- ① 投稿希望者は、事前に事務局（編集委員会）に掲載希望と大まかな内容（ページ数含）を知らせてください。掲載希望受付後は編集委員会で協議検討し、掲載の可否及び執筆要領を連絡します。
- ② 原稿締切は必ず厳守してください。承認を受けた原稿でも締切後の提出は掲載できない場合があります。
- ③ 1次校正は、必ず執筆者と編集委員会が行いますが、2次校正以降は事務局（編集委員会）に一任していただきます。

4 責任及び著作権について

- ① 会報掲載後の著作権については、「愛媛大学教育学部同窓会」が所有するものとします。ただし、掲載内容に関することは執筆者の責任で対応していただきます。

会員の皆様の投稿をお待ちしています。

愛媛大学教育学部同窓会 編集委員会

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では二〇二六年四月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二五年十一月二十六日(水)

～二〇二六年三月十六日(月)

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員、特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

- 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。
- 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。
- 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。



放送大学
教養はエネルギーだ。
一科目からでも学べます
2026年度4月入学生募集中!
(2026年3月16日まで)
問合せ先 愛媛学習センター
TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。●資料請求はこちら(総合受付)
放送大学 www.ouj.ac.jp ☎043-276-5111

会報送付停止等について

会報送付の停止を希望する場合には、下記の2つの方法があります。

① 送料を振込み、事務局から送付している場合

会報表紙に記載されている事務局に連絡いただければ、次の号から送付が停止します。なお、連絡の際には封筒に貼ってある氏名右下にあるID番号とお名前をお伝えください。事務局員は、基本月から金の午前中業務についています。これらの日以外は留守電対応となりますので、特にID番号をお伝えください。

② 校区の小学校から送付されている場合

住まわれている住所を校区とする小学校の「愛媛大学教育学部同窓会担当者」に連絡すれば、会報の送付は停止します。事務局に連絡いただいても構いませんが、その際には「氏名と校区小学校」をお伝えください。事務局から該当小学校担当者に連絡いたします。

③ 会報が2部届く場合

会報が2部届く場合があるかと思いますが、事務局からと校区小学校から届いていると考えられます。前述のように事務局から送付している場合は、送料が振り込まれている会員となりますので、恐れ入りますが校区小学校担当者に連絡をして停止をお願いしてください。

④ 住所が変わった場合

住所が変わった場合には、事務局まで連絡をお願いいたします。また、送付しても2号(回)続けて「住所不明」で返送されてきた場合には、送付を停止しております。

「最近会報が届かない」と言われる場合は事務局に連絡をお願いします。

創基150周年記念

第20回愛媛大学教育学部同窓会懇親会のご案内

第20回の同窓会懇親会を下記要領で計画しております。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

日時 令和8年8月22日(土)

申込方法

次のいずれかの方法でお申込みください。

- ① 下記の二次元コードから申し込む。
- ② メール、電話等で事務局まで連絡する。



お待ちしております

会場 ネストホテル松山
(旧松山ワシントンホテルプラザ)
松山市二番町1丁目7番1号
☎089-945-8111

締切期日

令和8年7月31日(金)

会費 6,000円(当日会場にて集金)



〈第19回懇親会の様子〉



二次元コード申込内容

- ・氏名 ・〒番号 ・住所
- ・メールアドレス
- ・電話番号(連絡が付きやすいもの)
- ・卒業校(師範学校、愛媛大学)
- ・卒業年(年度ではありません)

個人情報につきましては懇親会に関する
連絡以外に使用いたしません

150周年記念号

思い出原稿募集!

教育学部同窓会では、今年愛媛に教員養成機関(愛媛師範学校)が設置されて150周年にあたるため令和9年2月1日発行予定の会報143号を「150周年記念号」と位置づけ、会員の皆様からの思い出や古い資料・写真等を募集し、次世代に引き継ぎたいと考えています。

つきましては、愛媛師範学校や女子師範学校・青年師範学校・昭和24年以降の愛媛大学教育学部のそれぞれの時代の様子について下記の要領にて事務局までお送りください。

【原稿】 字数・内容は自由です。

【写真・資料】 写真・資料につきましては、事務局で撮影した後、お返しいたします。

【投稿締切】 令和8年9月30日(水)です。

連絡先：愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 089-927-9383 (月～金 午前中)

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com 担当：阿部・矢野

※不在の場合は、留守電になりますので連絡先をお知らせいただければ事務局より連絡いたします。



※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます
しよこます

| | |
|-----------|------------------|
| 故 檜 田 良 様 | 令和七年七月 令和八年一月 |
|-----------|------------------|

寄付者名

秋の叙勲
☆瑞宝双光章

遠藤 誠 様
富長千恵美 様

祝・叙勲

(令和七年十一月三日)

敬 弔

(物故会員)

(死亡年月日)

(氏 名)

5・1・27

檜田 良
(昭19 愛 大)

7・2・15

山本満洲男
(昭29 愛 大)

7・4・2

大野 重高
(昭17 愛 大)

7・5・5

大原 金男
(昭22 愛 大)

7・6・5

浮田 宏
(昭29 愛 大)

7・6・14

吉井晋一郎
(昭38 愛 大)

7・7・10

玉井 幸三
(昭38 愛 大)

7・7・23

後藤 和市
(昭33 愛 大)

7・7・30

田中 元
(昭24 愛 大)

(死亡年月日)

(氏 名)

7・7・30

井上 徹
(昭24 愛 大)

7・8・1

國田 淑子
(昭24 愛 大)

7・8・14

石丸 常
(昭37 愛 大)

7・8・25

今宮 峨
(昭34 愛 大)

7・9・6

向井 正孝
(昭34 愛 大)

7・9・16

高島 悦子
(昭25 愛 大)

7・10・4

垣内 雅夫
(昭43 愛 大)

7・10・4

中岡 紘子
(昭37 愛 大)

7・10・5

大塚 智司
(昭37 愛 大)

(死亡年月日)

(氏 名)

7・10・8

渡部 修治
(昭34 愛 大)

7・10・9

廣田 計邑
(昭22 愛 大)

7・10・26

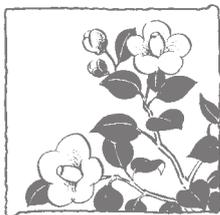
楠本 隆
(昭20 愛 大)

7・11・12

兵頭 竜郎
(昭41 愛 大)

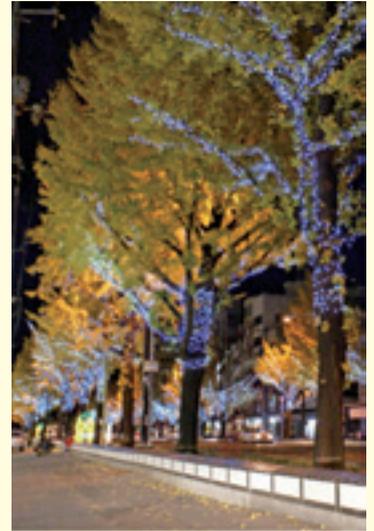
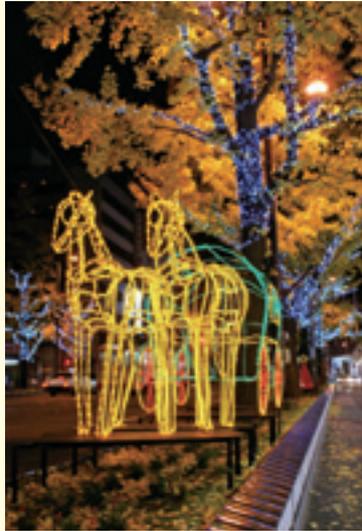
7・11・17

道岡 榮子
(昭53 愛 大)



会員写真館

今回は、松山市花園町及び堀之内公園のイルミネーションを特集してみました。



花園町近辺



堀之内公園からの松山城

写真提供：
相原理事（S52卒）

探しています！

教育学部同窓会では、今年愛媛に教員養成機関（愛媛師範学校）が設置されて150周年にあたるため古い資料や写真等の収集・整理に力を入れ、次世代に引き継ぎたいと現在取り組んでいます。

つきましては、愛媛師範学校や女子師範学校・青年師範学校・昭和24年以降の愛媛大学教育学部に関する資料・書物・校章・校旗・校舎・行事の写真等がありましたら同窓会事務局までご連絡ください。

特に、現在探しているのは、100周年を記念して発行された

100年のあゆみ

の冊子です。残念なことに同窓会事務局には1冊しかなく、それもバラバラになりかけています。

もし、お手元にある事務所に寄贈しても良いと思われる方がおられましたら、ぜひご連絡ください。



連絡先：愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 089-927-9383（月～金午前中）

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com 担当：阿部・矢野

※不在の場合は、留守電になりますので連絡先をお知らせいただければ事務局より連絡いたします。